

思考—失わずに秩序づける

実践を通じた体系的思考入門

Kai Froeb



この翻訳について

この翻訳はAIによる機械翻訳で作成されたもので、まだ人の手による完全な校閲を経ていません。誤りを見つけられた場合は、feedback@reflexivitypress.comまでお知らせください。本書をご購入のうえ誤りをお知らせくださった方には、訂正版を電子書籍で無料でお送りします。

著者

Kai Froeb

https://kai.froeb.net

出版社

Reflexivity Press

リスボン

カイ・フローブ版

最新版と訂正のお知らせ:
https://reflexivitypress.com/ja/books/froeb-systematisches-denken

ご意見: feedback+ja.systematisches-denken.v0.56@reflexivitypress.com

表紙: © Reflexivity Press, Kai Froeb. https://reflexivitypress.com/en/about/cover-art/

刊行

2026-11-21

翻訳: 2026-11-25

版 0.56

Typeset with LaTeX (LuaHBTeX, Pandoc + Eisvogel)

アクセシビリティについて

すべての図版には説明が付されており、文脈から理解可能です。

成立についての注記

本書は言語モデルClaude (Anthropic)を用いて執筆された。構成、内容および責任は著者に帰する。翻訳はAI言語モデルの支援を受けて行われた。作業の進め方については著者の論考を参照：https://reflexivitypress.com/ja/about/machines-that-write/

© Copyright 2026 by Reflexivity Press, リスボン.

無断転載を禁じます。本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）ならびに無断複製物の譲渡および配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

AI学習: 明示的に許諾（ZMC 1.4、第11条）。

Zero Marginal Cost License 1.4 (ZMC 1.4)

読者向けの要約

限界費用がゼロのものには、障壁があってはならない。

許可されること

- 本著作物を無料で読み、ダウンロードし、複製することができます。
- 内容を変更していない著作物を、著作者名・出典・ライセンスを表示したうえで、非営利目的でデジタル形式により再配布することができます。
- 内容を変更しない範囲で、ファイル形式を技術的に変更し、アクセシビリティのために必要な調整を行うことができます。
- 個人的・非営利目的の利用のために個々の部数を印刷し、または印刷を依頼して贈呈することができます。直接費用については、利益を上乗せせずに実費精算が可能です。
- 自身の個人的、非公開かつ非営利の利用のために翻訳を作成することができます。
- 変更のない著作物を、非営利で、版・日付・最新版への参照を付けて公開でミラーリングすることができます。
- 著作物を教育・研究のために個人的に利用し、非営利の利用において学術上の基準に従って引用することができます。ただし、引用集によって著作物そのものを代替してはなりません。

条件

利用は非営利に限られます。公衆へ再配布する場合は、合理的に可能な限り著作者、著作物の出典、ライセンスを表示してください。著作物を再ライセンスし、新版を発行できるのは権利者のみです。追加の法的または技術的な制限を課してはならず、著作者や出版社による支援・推奨があるかのように装ってはなりません。

その他のすべての権利は留保されます

このライセンスは、明示された利用のみを許可します。明示されていない利用は、すでに法律で認められている場合を除き、権利者の別途の許可が必要です。

法律上の利用権限および報酬請求権は影響を受けません。 第三者の権利には別途の条件が適用される場合があります。

重要なお知らせ： この要約は理解の助けとなるためのものであり、独立したライセンス契約ではありません。拘束力を持つのは完全版の**ZMC 1.4**です：

https://reflexivitypress.com/ja/zmc/



著者について

Kai Froeb（*1963）はポルトガルの大西洋岸に在住。

あなたがこの本を手に取っているということは、著者について最も重要なことはもうご存じだということです。彼はあなたに「信じてほしい」とは言いません。彼のすべての本は、そこに書かれていることが自分の思考で検証できるように構築されています。それは謙虚さの表現ではなく、構造そのものなのです。あなたの判断が本文と異なる場合、それはこの本の限界に達したか、あなたの思考の特質が可視化されたかのどちらかです。どちらも同意よりも価値があります。

この道は、長く並行して走ってきた二つの軌跡を経てきました。一つはリューネブルクの高校時代とゲールデ公民大学のサマースクールで始まりました。そこで三週間かけて一つのテキストを徹底的に読み込んだのです。その道は数学、情報科学、経営学、文化学、法学へと続きましたが、学位は意識的に取得せず、学問分野を横断する道を確保しました。もう一つは1980年、コモドールCBM 8032でワイゼンバウムのELIZAの再現版を使ったことから始まり、それが職業となりました。プログラミング、アプリケーションサポート、プロジェクト管理、トレーニング——最初は小規模ソフトウェアハウスで、次に大規模IT企業で、最後は十数年にわたり企業内委員会と労働組合で活動しました。

二つの軌跡が一体であることは、遅れて明らかになりました。四十年のソフトウェア仕事で習慣となること——構造の分解、依存関係の可視化、引っ張ったときに何が耐えられるかの検証——は、哲学的論証に必要なものと同じ手法なのです。

1998年以来、Froebは**hegel.net**を編集しています。これは11言語で利用可能な、おそらくインターネット上で最も包括的な多言語ヘーゲルリソースであり、ヘーゲルと19世紀ヘーゲル派のデジタル化オリジナル版500点以上を含む公開アーカイブを備えています。

hegel.netを通じてJohannes Heinrichsとの接触が生まれ、Froebは現在、Heinrichsの作品を出版者として刊行しています。

彼のモットーは学生時代に由来し、それ以来、有用であることが証明されています。「真理は全体である。」この言葉は、何も抑圧する必要のない統合を要求します——だからこそ、聞こえほどには実現が難しいのです。

もしこの本の中に誤りや見落としを見つけられたなら、あなたの批評はこの本に贈ることができる最も価値ある貢献です。

目次

図目次 xi

第0章 何が問題で、どのように進むのか 1
0.1 問い 1
0.2 誰にも依拠しない 2
0.3 歩みとその基準 2
0.4 言葉 3

第1部 何が互いに属しているのか 5

第1章 何のために秩序づけるのか 7
1.0 読むときにすでに起こっていること 7
1.1 最小の秩序 8
1.2 概観と取り出し 8
1.3 凝縮する 10
1.4 何が大切か 11

第2章 観点 13
2.1 何に従って秩序づけるか 13
2.2 三つの水準 14
2.3 複数の観点 16

第3章 系列と区画 17
3.1 事柄について何も知らない秩序 17
3.2 区画の中の区画 18
3.3 秩序が黙っていること 18
3.4 系列が見えるようにするもの 20

第4章 パターン 21
4.1 反復するもの 21
4.2 見出されたものか、作られたものか 22
4.3 パターンが未決のままの場所 23
4.4 粗すぎる、細かすぎる 24
4.5 パターンが挫折するもの 24
4.6 第Ⅰ部の回顧 25

第2部 なぜそれが互いに属しているのか 27

第5章 原理 **29**
5.1 パターンを生み出すもの 29
5.2 一般化と原理 29
5.3 原理がすべてを説明するとき 30
5.4 原理が挫折するもの 31

第6章 根拠 **33**
6.1 空虚、任意、十分 33
6.2 十分さの量 34
6.3 推論 34
6.4 根拠が誰に仕えるか 35
6.5 事柄の中の根拠 36
6.6 個別の根拠が挫折するもの 36
6.7 第Ⅱ部の回顧 37

第3部 一つの全体がどのように構成されているか **39**

第7章 種 **41**
7.1 クジラ 41
7.2 正しく、そして良い 42
7.3 対象が境界を引かない場所 43
7.4 区分することがやまないとき 44
7.5 種が挫折するもの 44

第8章 部分 **45**
8.1 自転車の二つの分解 45
8.2 分節を良くするもの 46
8.3 分節が、分節されるものより重要になるとき 46
8.4 専門書の分節 47
8.5 分解が挫折するもの 47

第9章 連関 **49**
9.1 すべては連関している 49
9.2 連関の三つの種類 50
9.3 樹と網 50
9.4 関連が誤って読まれるとき 52
9.5 すべてがすべてと連関しているとき 53
9.6 網がどこで挫折するか 53

第10章 経過 **55**
10.1 どう始まったのか 55
10.2 事柄が経過としてのみ捉えられる時 55
10.3 何かに向かって運動するもの 56
10.4 リズム 57
10.5 種が段階であるとき 57

10.6 同時に二つの秩序 58
10.7 経過が挫折するもの 58

第11章 自己展開 **59**
11.1 数 59
11.2 普遍、特殊、個別 60
11.3 それがどこまで支えるか 62
11.4 普遍をどのように見いだすか 62
11.5 対象を変化させる概念 64
11.6 自己展開と他の四つ 64

第12章：どちらの秩序がよりよいか？ **67**
12.1 適切な問い 67
12.2 三つの段階 67
12.3 相互参照 69
12.4 研究における、そして書くときの秩序づけ 70
12.5 第III部の回顧 71

第4部 秩序が私たちに課すもの **73**

第13章 凝縮と喪失 **75**
13.1 凝縮の三つの段階 75
13.2 なぜ凝縮が成功するのか 75
13.3 残余 76

第14章 死んだ秩序 **79**
14.1 書式47B 79
14.2 死んだ秩序をどこで見分けるか 79
14.3 整合的欺瞞 81
14.4 共有された秩序 83

第15章 自分自身の秩序 **85**
15.1 自分自身を秩序づける思考 85
15.2 自分自身の秩序はどこから来るか 86
15.3 秩序づける者の高慢 87
15.3a 道 88
15.4 試しとしてのこの本 88
15.5 未解決のまま残るもの 89

付録A: 演習 **91**
A1: 決定を秩序づける 91
A2: 論争を秩序づける 91
A3: 保管場所を整える 92
A4: 凝縮と取り戻し 92
A5: 講演を分節する 93

A6: 章を吟味する 93

付録B: 誰がこれを同じように見たか、そして最も強い反論 **95**
B1: 個々の章へ 95
B2：五つの反論をそれぞれの形態で 99
B3: 他の本でさらに読む 102

用語集 **103**
利用の手引き 103
普遍、特殊、個別 103
止揚 104
アクセス（Zugriff） 104
パターン（Muster） 105
リズム（Rhythmus） 105
一般化（Verallgemeinerung） 105
事実的、機能的、概念的連関（faktischer, funktionaler, begrifflicher Zusammenhang） 106
体系、体系的（System, systematisch） 106
偏見 106
共有された秩序 107
凝縮（Verdichtung） 107
分類（Klassifikation） 108
原理（Prinzip） 108
基準（Maßstab） 108
増殖する秩序（wuchernde Ordnung） 109
外的（äußerlich） 109
推論（Schluss） 109
本質性（Wesentlichkeit） 110
根拠：空虚、恣意的、充足（Grund: leer, beliebig, zureichend） 110
概念（Begriff） 110
概観（Überblick） 111
機械的および生きた秩序（mechanische und lebendige Ordnung） 111
正確で適切な区分（korrekte und gute Einteilung） 112
残余（Rest） 112
相互参照（Verweis） 112
秩序（Ordnung） 113
秩序づけの仕方（Ordnungsweise） 113
系列と区画（Reihe und Fach） 113
経過（Verlauf） 114
緊急性（Dringlichkeit） 114
編成（Komposition） 114
自己展開（Selbstentfaltung） 115
観点（Hinsicht） 115
重要性（Wichtigkeit） 116

関係（Relation） 116
首尾一貫した欺瞞（kohärente Täuschung 116

図目次

1 種の記号：三つの分かれた形態、枠なし。それらの間の間隔が意味を担う。 41
2 部分の記号：唯一の閉じた形態、内部で区分されている。 45
3 関連の記号：線で結ばれた複数の形態。 49
4 過程の記号：先端に矢印のある曲がった軌道。まっすぐな矢印は、単に経過（Verlauf）が意味されているところで進歩を主張するため、曲がっている。 55
5 自己展開の記号：逆さまの三角形が中に入った三角形で、その先端は辺の中点に当たる。同じ図形がその各部分の中で反復される。 59

第0章 何が問題で、どのように進むのか

0.1 問い

秩序づける人は、何かを再び見つけたいのです。保管場所（Ablage）にある書簡を、作業場にある道具を、本の中にある思考を。そして、すべてを一つひとつ通して見なくても、自分が何を持っているかを見たいのです。この両方がうまくいくのは、多が少になるときだけであり、そのとき何かが失われます。この本が問うのは、大切なことが失われることなく、それがどうすればうまくいくか、です。

ここで言われているのは、ファイルすること以上の意味です。引き出しを整える人は物を秩序づけます。動物の種（Tierart）を規定する人、概念を形成する人、理論を分節する人、本を組み立てる人は、思考を秩序づけます。クジラが哺乳類であること、数が自然数・整数・有理数に分かれること、教科書がこの章で始まりあの章では始まらないことは、いずれも秩序であり、それには何を理解するかがかかっています。この本が扱うのは、思考によるこの秩序づけです。区分や概念形成について、パターン（Muster）↑、原理（Prinzip）↑、根拠について、分節（Gliederung）についてです。この本は、ファイルすることから始めます。なぜなら、そこではあらゆる段階を自分で確かめることができるからです。そしてそこから、生物の種へ、数へ、科学的説明へ、テクストの構成へと進みます。

したがって、この問いを立てるのは、測定系列を評価したり新種を記載したりする女性研究者であり、事例（Fall）を分節する法律家であり、専門書を書く人であり、また専門書を書くはずのプログラムであり、自分の書類をフォルダに入れるだけの人です。答えはこれらの場所で精確さの度合いが異なりますが、互いに関連しています。

0.2 誰にも依拠しない

この本は誰にも依拠しません。この本が主張することは、自分自身の秩序づけにおいて検証できるはずです。つまり、この本を読むことにおいて、机の上において、保管場所において、自分が分節するテクストにおいてです。例は説明するものであって、証明するものではありません。いくつかは考え出されたものであり、いくつかは日常から取られたものであり、どこでもそうであるかは重要ではなく、追理解できることが重要です。支えるのは議論です。ある段階に当然の反論があれば、その反論は、見つけうる最も強い形で提示され、その後に応答（Antwort）が置かれます。応答が不十分であれば、そう言われます。

多くの考えは他の人々がすでに考えたものであり、あるものは遠い昔に考えられています。そうである場合、それは付録Bに、さらに読むための手がかり（Weiterlesen）として示されています。また、思考が遂行された後の段落の末尾の一文で示されることもあります。それによって証明されるべきものは何もありません。ここで支えない段階は、有名な名前がそれを歩んだからといって支えるようにはなりません。

0.3 歩みとその基準

この本はそれ自体が一つの秩序であり、秩序づけについての思考の秩序です。それゆえ、この本は秩序について述べることに照らして測定されなければなりません。そして、それを読む人は、そのための試金石を手にしていることになります。

基準（Maßstab）は、あらゆる秩序に突きつけることのできる問いです。すなわち、その秩序は、なぜ自分の肢節がこれらであり、なぜそれらがこのように配置されているかを言うことができるか、という問いです。アルファベット順の秩序はそれを言うことができません。「Hund」が「Huhn」の後に来ることは、犬について何も語りません。数の区分は、それぞれの種類が、前の種類における計算がうまくいかなかったことから生じるものであり、それを言うことができます。秩序が自分の根拠を示すことができない限り、その秩序は事物の外側から付けられており、それが省くものは、まさに大切なものである可能性があります。

この問いに沿ってこの本は進みます。第一部は、何が一緒に属するかを言うが、なぜかは言わない秩序、つまり、分類するときに従う観点（Hinsicht）について、系列（Reihe）と区画（Fach）について、パターン（Muster）について扱います。第二部は、なぜかを、原理と根拠について問います。第三部は、一つの全体がどのように構築されているかを問い、そのために五つの秩序の仕方（Ordnungsweise）を見出します。その最後のものは、自分の根拠をそれ自身で示します。第四部は、あらゆる秩序が何を犠牲にするかを問います。

これは先取りであり、まず実証されなければなりません。なぜこの本がまさにこれらの部分を持ち、この順序を持つのかは、それぞれの部の末尾で、何が秩序づけられたかを見ることができるようになったとき、そして全体についてはこの本の末尾で述べられます。それを別様に分節しようとする人は、同じ問いにおいて、両方の分節を比較する手段を持っています。

0.4 言葉

秩序づけるときに見出されるものについて、本書は可能な限り日常言語の言葉を用います。いくつかの専門用語は、これらの事柄について定着しており、また他の場所でも出会うものであるため、採用しています。圧縮、分類、構成、関係。それぞれは、その言葉が本来の場所を持つところで、すなわちその箇所で見出されたものから説明されます。巻末の用語集が、それがどこであるかを示しています。

本書は独立した一冊です。隣り合う四冊があり、それぞれ異なる問いを立てます。一冊は真理についてで、読者が読みながらすでに行っている吟味から真理を展開します。一冊は論理学についてで、規定することの基本形式を辿ります。一冊は倫理学についてで、同じ吟味から、人間が互いに負っているものを展開します。そして一冊は組織論についてで、本書から多くを取り入れ、知識・根拠・訂正がそのうちで働くために、諸制度がどのように構築されていなければならないかを問います。どれも他を前提としません。真理 (2025) がもっとも遠くまで遡ります。ある秩序を他の秩序よりも良いと呼ぶ者は、より良いものとより悪いものとを区別できることを前提としており、そこではそれが独自に展開されます。本書では、秩序づけることがそれを必要とする限りで、秩序づけること自体において示されます。

引用の翻訳について: ヘーゲルおよび他のドイツ語圏の著者からの引用は、本版のためにドイツ語原文から本書の用語法で翻訳されてお

り、既存の翻訳から引き継いだものではありません。複数の有力な翻訳がある場合、それらはそれぞれ異なる解釈を示します。ここでの翻訳は本書の解釈に従います。訳文を検証できるように、ドイツ語原文が添えられています。短い引用では引用文の後の括弧内に、長い引用ではその下の別段落に、または引用の典拠を示す脚注に示されます。非常に短い言い回し（四語未満）は原文なしで示され、ドイツ語の本文中にすでに他の言語で書かれている引用は変更されません。

さらに読む: 真理

第1部 何が互いに属しているのか

第1章 何のために秩序づけるのか

1.0 読むときにすでに起こっていること

ここまで読んだ人は、すでに秩序づけています。前のページを振り返ってみてください。主要な思考は何だったか、例は何だったか、脇に置かれた注意は何だったか。答えは、見返す前にたいてい用意されています。次に、次の段落を、その中のすべてが同じように重要になるように読んでみてください。

それはうまくいきません。何も重みづけしないという意図（Vorsatz）でさえ、一つの重みづけです。というのも、それはその瞬間、大切なことになるからです。それを別様に経験する人は、そのとき何が起こったかを吟味してみてください。それも一つの所見でしょう。

ですから、あなたはすでに、何が大切かを区別しています。そうでなければ、読むことはできなかったでしょう。すべてを同じように重要だと受け取る人は、ページから何も保持しません。そして、理解することが秩序づけることであると否定しようとする人は、否定する際に秩序づけなければなりません。自分の根拠を前に置き、装飾を後ろに下げるのです。ですから、この本は、読んでいる間に自分が行っていることについて扱っており、この本がそれについて述べることは、この行いにおいて検証できます。

頭の中では、それがあまりに速く起こるので、それを眺めることはできません。よりゆっくりと、目に見える形で、それは机の上で起こります。

1.1 最小の秩序

□□ 1: □□□□

自分の机、またはそれに最も近い平面を見てください。そこに無秩序が支配しているなら、それはどのような種類のものでしょうか。すべてが、落ちてきたままになっていますか。
まれです。毎日使うものは手の届くところにあります。一つの事柄に属するものは、たとえ積み重なりが曲がっていても、一緒にあります。まだ処理すべきものは上にあります。他人の机を片付ける人は、所有者の抗議によってそれを経験します。今やすべてが一つの場所にあるにもかかわらず、所有者は何も見つけられません。

机の上で起こっていることは、存在する最小の秩序です。これはあちらに置かれ、あれは脇に置かれます。両方は一つになって起こります。請求書を一つの束に置く人は、それを手紙から分けています。何かを選り分ける人は、それを処分できるもののところへ置いています。何かを一緒に置くことは、それを他のものから分離することなしにはできません。

反論：それなら、あらゆる配列（Anordnung）は秩序です。風が隅に吹き寄せた落ち葉の山でも、これはあのものの隣にあります。

応答：それらは一緒にありますが、誰かが探すために使うことのできる根拠からではありません。秩序という言葉はここでは、何かを推測させる配列を意味するはずです。つまり、何がどこにあるか、何が欠けているか、何が一緒に属するか、ということをです。曲がった積み重なりは、それを使って作業する人にとっては、この意味で秩序づけられています。片付ける人にとってはそうではありません。なぜなら、その根拠を知らないからです。このことから、この本全体を貫く何かがすでに示されています。配列が秩序であるかどうかは、物だけに依存するのではなく、その中で誰が探すのか、そしてその人が秩序について何を知っているかにも依存するのです。

1.2 概観と取り出し

三つの物が入った引き出しは秩序を必要としません。引き出せばすべてが見えます。三百の物が入った引き出しは必要とします。すべてを

あらゆる結びつき（Verbindung）とともに一望できる人は、秩序を必要としないでしょう。誰もそうではありません。記憶は一度にわずかしか捉えず、注意はさらにわずかです。棚、フォルダ、データベースへは、ほぼ任意（beliebig↑）に多くを外部化できますが、外部化した断片が増えるごとに、それをどうやって再び見つけるかという問いが大きくなります。

この状況から二つの要求が生じます。すべてを一つひとつ通して見ることなく、何があるか、それがどう関係しているかを見たい。これを概観（Überblick）↑と呼ぶことにします。そして、ある場所から別の場所を見つけたい。これを取り出し（Zugriff）と呼ぶことにします。

この二つが異なることは、ほとんどすべての専門書が示しています。というのも、それぞれの専門書は、二つのそれぞれに固有の道具を持っているからです。前には目次があります。目次は、本が何から成り、どのような順序であるかを示し、読んだ人は、自分に何が待っているかをおおよそ知っています。特定の細部をそこで見つけることはまれです。後ろには索引があります。索引は一歩で、ある単語が現れるすべての箇所へ導きますが、その本がどのように構成されているかについては何も語りません。目次は事柄に従って、索引はアルファベットに従って秩序づけます。そして、まさにアルファベットが事柄について何も知らないからこそ、その単語を知っている人なら誰でも索引を使いこなせます。

どちらの成果も測定できます。取り出しについては、任意の場所から別の場所へ行くのに何歩必要か、そして事前にどれだけ知っていなければならないか。索引は一歩で済みますが、その単語を知っていることを要求します。概観については、全体を見るためにいくつの肢節を頭に保持しなければならないか。五つの部分からなる目次は概観を与えます。部分なしの四十の章からなる目次は、たとえ各章に良い題名が付いていても、概観を与えません。

秩序を作る人は、それによって、後で何が容易に見つかり、何が見つけにくいかを決定します。たいてい、彼が気づくのは、自分が探すときです。

1.3 凝縮する

□□ 2: □□□□□

よく知っている人との最後の長い会話を思い浮かべてください。読み進む前に、それが何についてだったかを一文で言ってみてください。
その文はおおよそ次のようになるでしょう。「彼は仕事のことで心配しているが、落ち着いて見ている」 (DE: „Er sorgt sich um seine Stelle, sieht es aber gelassen.“)。一時間が一文になりました。天気、コーヒー、新しい眼鏡、話題に至るまでの寄り道は消えています。そして、そのどれもがあなたには欠けていません。

同じことが引き出しの中でも起こります。三百の物を六つの区画に入れる人は、三百の場所の代わりに六つの見出しを覚えなければなりません。それぞれの見出しは、その下にあるすべてを代表しています。秩序づけることは凝縮すること（verdichten）です。多が少によって代表されるのです。技術は、データを凝縮することを、圧縮（Kompression）と呼びます。押し縮めるを意味するラテン語に由来します。この言葉はここにも合います。

どこまで行ってよいかは、極限事例が示します。あらゆるファイルを一つの記号（Zeichen）に凝縮する手続きは、他のどんなものよりも強く圧縮しており、使い物になりません。というのも、一つの記号からは何も取り戻せないからです。凝縮（Verdichtung）が使い物になるのは、そこから大切なものを取り戻せる限りです。技術は二つの種類を知っています。一つは何も省かず、そこから全体が再び生じます。もう一つは何かを放棄します（preisgeben）。たとえば画像では、目がほとんど区別できない色の階調です。どちらも使い物になります。その価値を決めるのは、何が放棄されるかです。

このことによって、良い凝縮と悪い凝縮を区別できます。良い凝縮は、大切でないものを放棄し、大切なものを保持します。悪い凝縮は、両方を取り違えます。あなたが会話を「彼はまた愚痴っている」という文にまとめたなら、それはより強い凝縮だったでしょう。というのも、その文は彼との多くの会話に当てはまるからです。それは注意を節約し、次の会話を予見可能にします。しかし、それは今回違っていたものを正確に省いています。偏見（Vorurteil）はこのように働きます。偏見は強く速く凝縮し、その際、大切な差異（Unterschied）を放棄します。速い凝縮なしには、どんな会話にも入れません。というのも、会話に入るときのあらゆる期待は一つの凝

縮だからです。偏見になるのは、会話がもはやそれを訂正できなくなるときです。それに対して助けになるのは、より少なく凝縮することではありません。会話を全く要約しない人は、後で以前より多くを知っているわけではありません。助けになるのは、別様に凝縮することです。速い文が放棄した差異を取り戻し、そのうちのどれが今回重要かを吟味することです。

反論：それなら秩序づけは常に喪失です。何も失いたくない人は、すべてを現状のまま保存します。

応答：いずれにせよ、すべては保存されています。三百の物は、秩序づけた後も引き出しの中にあります。失われるのは見通しの中の何かです。「ケーブル」という見出しは、どのケーブルかは言いません。これが概観の代価であり、それを払いたくない人は、三百の場所を持ち、概観を持ちません。ですから、選ぶべきは喪失と無喪失の間ではなく、喪失同士の間です。この選択に、秩序が役立つかどうかがかかっています。

第二の反論：検索エンジンがあれば、もはや秩序づける必要はありません。探しているものを入力すれば、手に入ります。

応答：手に入るのは、名指すことのできるものだけです。検索は取り出しを与えますが、概観を与えません。検索は、他に何があるか、何を問うべきだったかを示しません。そして、検索は、以前に検索できるように把握されたものしか見つけません。差出人というフィールドがない文書館は、差出人で検索できません。ですから、秩序づけは続けられるのです。ただし別の場所で、システムを構築する人によって、将来のすべての事例のために同時にです。これが何を意味するかは、第三の秩序の仕方で語られます。

1.4 何が大切か

こうして、その後のすべてがかかっている問い、そしてあなたが読む際にすでに答えている問い（第1.0章）が戻ってきます。何が大切か。友人にとっては、それは仕事についての心配でした。もし眼鏡店の女性が聞いていたなら、彼女には新しい眼鏡が残ったでしょう。彼女はより悪く凝縮したのではなく、別の問いのために凝縮したのです。こうして第一の基準が見出されます。凝縮するための問いです。この問いによって、凝縮が、保持すべきものを保持したかどうかを吟味できます。

日常言語は、大切なものを表すために二つの言葉を知っており、それらを異なって使います。重要な（wichtig）ものは、誰かにとって、ある問いに関して（im Hinblick auf）です。本質的（wesentlich）なものは、誰が問うかには無関係に、事柄そのものに帰属するものと呼ばれます。契約、病気、争いにとって本質的なものです。そういうものがあるかどうかは、言葉が決めることではありません。言葉は、誰かが自分の問いを唯一の正しい問いだとみなしていることを表現しているにすぎないこともあります。

一つの事例がこの違いを手に取れるようにします。ある人は自分の本棚を色で秩序づけます。ズーアカンプ版はそれを特に近づけました。その背表紙は並べると色のスペクトルをなすのです。他の人は大きさで秩序づけます。それには良い根拠があります。区画をより狭くでき、図書館は書庫で本を判型ごとに分けます。そうする理由も少なからずあります。棚がどう見えるか、どれだけ入るかという問いにとっては、どちらも良く秩序づけられています。しかし、特定のテーマについて何かを探す人、あるいは一人の著者のすべての本をまとめて持ちたい人は、ここでは本の傍を通り過ぎて秩序づけられている、と言うでしょう。色と判型は、正確な意味で外面的な特徴（Merkmal）です。それらは本の外側にあり、本とは中に書かれていることです。しかし、彼はこの基準をどこから取るのでしょうか。彼は単に、第一の問いの隣に別の問いを置くのではありません。彼は本自身にある何か、本を本たらしめているものに依拠しています。それが事柄から来る基準なのか、それとも本の場合に通例の問いなのかは、この時点では決定できません。

問いは未決のままであり、この本の歩みはそれにかかっています。基準は段階ごとに事柄へと近づきます。まず、人が選ぶ観点として、次に、物に見出される反復として、次に、物がそこから帰結する根拠として、最後に、なぜ自分の肢節がこれらであるかを示す秩序として。最後に、事柄そのものに属する基準が、どんな意味で立つのかは、この歩みが示さなければなりません。その第一歩は観点、つまり何に従って秩序づけるかです。

第2章 観点

2.1 何に従って秩序づけるか

□□ 3: □□□□□□□□

自分の洋服箪笥を三回整えると想像してください。一回目は色ごとに、一回目はそれらを着ていく機会ごとに、一回目は季節ごとに。三つの秩序のそれぞれで、何が容易に見つかり、何が困難ですか。
色で分類すると、何が組み合わさるかが一目で見えます。しかし、面接のためにはすべての区画を探さなければなりません。機会で分類すると、朝、正しい区画に手が伸びます。しかし、濃紺のセーターが灰色のズボンに合うかは見えません。そして、友人との夕べにも同じように合うシャツは、オフィス用の区画にあり、夕方にはそこで探しません。季節で分類すると、春には一つの区画を丸ごと片付けられ、他のすべては以前と同じくらい無秩序のままです。

三つの秩序のそれぞれは、これをあのもののところへ置きます。そしてそれぞれは異なる根拠からそうします。同じ色を持っているから、同じ機会にそれを着るから、同じ季節に属するからです。そのとき見ているものを観点（Hinsicht）↑と呼ぶことにします。観点なしには秩序はなく、あるのは配列だけです（第1.1章）。なぜなら、観点こそが、あるものがなぜここにありあそこにないかを言うからです。

それぞれの観点は、それぞれの仕方で凝縮します。色で秩序づけられると、色の差異が重要になり、機会の差異は消えます。「青」という見出しは、あるものが結婚式に適しているかどうかを言いません。秩序がどの差異を保持しどの差異を放棄するかを決めるのは観点であり、それによって、その中で何が容易に見つかり、何が困難かも決まります。

反論：それなら、どんな秩序も事柄を捉えません。それぞれは、自分の観点が示させるものだけを示します。そして人は常に別様に秩序づけるだけで、そこにあるものに決して近づけません。

応答：何をきっかけに秩序を放棄するかに注意してください。自分の箪笥を色で秩序づけた人が、二週間後にもう一度整理し直すとき、その人は、秩序のない服そのものと自分の秩序とを比較したのではありません。彼は服をそのようには知りません。彼が気づいたのは、何かがうまくいかなかったことです。朝、必要とするものが見つからなかった、あるいはある一着をどこにも収められなかった。秩序を支えるもの、秩序が挫折するものは、秩序とともに作業するのと同じ経験のうちに示されます。そのためには、あらゆる秩序の外に立つ立場は必要ありません。それゆえ、秩序が「事柄そのもの」を捉えるかどうかという問いは、答えられないものではありません。ただ、それは比較によって答えられるのではなく、秩序とともに仕事をする中で、事例ごとに、そしてときには「いいえ」によって答えられます。この本が問うのは、もう一方の半分です。一方の秩序を他方の秩序から区別するものは何か、です。

2.2 三つの水準

机の上に、明日返却しなければならない図書館の本があります。半分しか読んでいません。それを読んでいる人には、この瞬間、これより重要なことはないように思われます。ここで「重要な」とは何を意味するのでしょうか。三つの意味を区別でき、三つとも同じ本で示せます。そのたびに異なるのは、その言葉が何に関係しているかです。

第一は緊急性（Dringlichkeit）です。それは、ちょうど自分を占めているものです。それは秩序づける人の状況に関係しており、本には関係しません。本が返却されれば、それは消えます。そして本は、以前のままです。

第二は、問いにとっての重要性（Wichtigkeit）です。引越しをして箱に荷物を詰める人にとっては、判型と重さが重要です。本から引用したい人にとっては、版とページ数が重要です。それを贈りたい人にとっては、表紙も重要です。この意味で重要なものは、ある状況にある誰かにとってではなく、ある問いに関して重要なものです。同じ問いを立てる人は、同じものを重要だと見出します。第1章が最初の基準を見出したのはこの水準（Ebene）です。

第三は本質性（Wesentlichkeit）です。それは、誰が何のために問うかに関わらず、本をそれがそれであるものにしているものです（第1.4章）。

最も容易に他の二つと混同されるのは、第二の水準、問いにとっての重要性です。「それは重要ではない」 (DE: „das ist doch unwichtig“)と言う人はたいてい、この問いにとって、という意味で、その問いを唯一のものだと思っています。「重要なのはこれだ」と言う人は、ときには問いを、ときには事柄を意味し、その違いに気づかないことがよくあります。何が重要かについての多くの論争は、二つの問いの間の論争であり、その二つが事柄についての情報だと思い込んでいます。逆に、ある人は、事柄そのものにあるものを、他の問いの中の単なる一つの問いだと思い込みます。

本質性については、最初の試し（Probe）を挙げられます。これが変われば、残りも変わるか。本ではこれを実行できます。新しい表紙になっても、それは同じ本です。読者にとっての内容、構成、価値は以前のままです。テクストを変えれば、残りすべてが変わり、極限事例では別の本になります。テクストは、背表紙の色よりも本にとって本質的です。

反論：収集家にとっては逆です。原本のカバーが付いた初版本は何倍もの価値があり、カバーのないものはそうではありません。そしてテクストには何も変わりません。それなら、本質性も問いにとっての重要性にすぎず、収集家の問いにすぎません。

応答：収集家と読者は、同じ言葉で二つの異なる事柄について語っています。読者は作品を意味しています。それは多くの版で存在します。収集家はこの一冊、歴史を持つ一個の物を意味しています。この一冊にとってカバーは外面的なものではありません。というのも、カバーを変えれば、この一冊がそれであるところのもの、完全な初版本か不完全な初版本かが変わるからです。試しは、二人のどちらでも機能します。しかし、それは、自分がその事柄を何として取るか、作品としてか一冊としてか、を知っていることを前提とします。そしてこの問いに、試しはそれ自体では答えません。

このことから、試しがどこまで届くかが示されます。試しは、何について語られているかが確定しているときに、何かが本質的かどうかを吟味します。しかし、それはしばしば確定していません。スマートフォンが落下したとき、本質的なものについて、端末について、落下について、損傷について問うことができ、そのたびに別のものが本質的です。端末では、何ができるか、落下では、それがどのように起こったか、損傷では、それが修復できるかどうかです。これを区別しない人は、本質的なものについて論争しながら、三つの事柄について語

っています。残りが何かに依存しているとはどういうことか、事柄を何として取るべきかをどうやって知るのかは、試しは言いません。両方は根拠への問いです。それは第二部に属します。

2.3 複数の観点

実験3の洋服箪笥には、三つの秩序のどれも解決しない問題があります。三つの観点はすべて正当です。朝、機会に従って手に取る人は、夕方には色に従って組み合わせ、春には季節に従って整理し直したいのです。三つの問いのどれも間違ったものではなく、どれも本来的なものではありません。それぞれに時があります。さらに、一つの観点だけでもきれいに分離しません。同じシャツがオフィスにも夕べにも適し、同じズボンが日常にも旅行にも適します。区画に厳密に従って服を着る人は、まさにそこにちょうどあるものに、必要もなく自分を限定します。機会は重なり合います。というのも、服は一つの機会のために作られたのではなく、複数の機会に合うからです。

画面上では、これは容易に解決できます。同じ服を、三回異なって表示するのです。箪笥の中では、各着衣は一つの場所にあります。複数の観点に同時に応えたい人は、観点を互いに入れ子にしなければなりません。まず機会ごとに、その中で色ごとに、またはその逆です。そして順序が、どの問いが一つの手で済み、どの問いが三つ手間がかかるかを決めます。それをどう行うか、何を犠牲にするかが、特徴に従って分類する秩序の問いです。

さらに読む: 真理 (2025), 章 10

第3章 系列と区画

3.1 事柄について何も知らない秩序

辞典はアルファベットで秩序づけます。「Hund」が「Huhn」と「Hunger」の間にあることは、犬について何も語りません。誰もそれを期待しません。それでも誰でも、辞典の中で探しているものを見つけます。その言葉を知っているならです。事柄について知る必要はありません。入力を日付でファイリングする文書館も同様に働きます。3月3日の書簡は3月4日の書簡の前にあります。両方が何についてであるかに関係なくです。書庫で本を入庫順に並べ、それぞれに通し番号を付ける図書館は、内容の知識なしで済みます。

このような秩序には三つの利点があり、三つとも事柄について何も知らないことに由来します。分類する特徴を知っている人なら誰でも使えます。頭文字、日付、番号です。新しいものは、古いものを移動させることなく挿入できます。次の書簡は末尾に来て、新しい単語はアルファベットの中のその場所に来ます。そして、何がどこに属するかについて誰も争う必要がありません。特徴がそれを決めるからです。

代価も同様に明らかです。このような秩序は取り出しを与えますが、概観を与えません（第1.2章）。アルファベットの隣人同士は互いに何の関係もなく、辞典が動物について何を含んでいるかを知りたい人は、辞典をすっかり通読しなければなりません。この秩序は、それぞれの物から唯一の特徴だけを保持し、その特徴からも分類に必要な分だけを保持します。それは非常に強い凝縮であり、事柄からは何も保持しません。

それは、その秩序に別のものを要求しない限り、欠陥ではありません。辞典は言葉を見つけさせるべきであって、世界を説明すべきではありません。欠陥になるのは、そのような秩序が事柄の秩序だと見なされるときです。つまり、ある年の書簡が、日付順にあるから秩序づけられていると信じ、その後、一つの出来事についての文通を二十の箇所から集めなければならない場合です。

3.2 区画の中の区画

人が使うほとんどの秩序は、複数の特徴を取り入れます。本棚は分野ごとに、その中で著者ごとに、その中で出版年ごとに並びます。保管場所は年ごとに分けられ、その中で差出人ごとに分けられます。このような秩序は観点を互いに入れ子にし、それによって第2.3章の問題を、解決できる限りで解決します。それぞれの物が一つの場所しか持てないところでは、複数の観点は順番にしか応えられません。

入れ子にすることには、単純に聞こえてしばしば破られる規則があります。一つの段階（Stufe）の中では、特徴が変わってはいけません。本を分野ごとに秩序づけ、途中でいくつかを色ごとに挿入する人は、見た目が美しいからといって、不正確に秩序づけたのではなく、二つの秩序を互いに押し込んだのであり、そのどちらももはや支えません。本を分野で探す人はそれを見つけられず、色で探す人はそれがそこにあることを知りません。それに対して、段階の間では特徴は変えてよく、変えるべきです。まさにそれこそが入れ子にすると呼ばれます。

第二の規則は第一の規則から帰結します。ある段階の区画は互いに重なってはならず、合わせて、その段階に達するすべてを受け入れなければなりません。二つの区画が重なるなら、特徴が一義的ではありませんでした。どれにも入らないものが残るなら、区画が欠けています。「その他」という区画は、ほとんどすべての保管場所にありますが、それは区画が欠けていることの告白であり、しばしば秩序全体の中で最も正直な区画です。

どの観点を上に置くかが、費用を決めます。年ごとに、その中で差出人ごとにファイリングする人は、ある年のすべてを一つの手で見つけますが、一人の差出人からのすべては、各年から個別に集めなければなりません。逆に差出人ごとに、その中で年ごとにファイリングする人は、差出人では容易に、年では困難になります。常に支払うのです。問いは、どの検索のためかだけです。入れ子になった秩序にできる最善は、最も頻繁に検索される観点を上に置き、他の観点を使われる順に段階付けることです。

3.3 秩序が黙っていること

一通の書簡が、あなたの母が賃貸している家の税金に関係しています。それは「税金」フォルダ、「母」フォルダ、「家」フォルダのど

れに属するでしょうか。そして、これらは事柄による秩序の始まりにすぎません。その隣には、あらゆる記録保管（Registratur）がそもそも従って働く二つ、日付と差出人があります。それらも互いに入れ子にすることしかできません。まず年ごとに、その中で差出人ごとに、またはその逆、発送した郵便は受領した郵便のところに、またはそれと分離して。どの選択も弁護可能であり、それぞれが、他の場所でその書簡を見えなくします。三年後にそれを「母」の下で探す人は、それがそこに同じように属していたはずなのに、それを見つけられません。

反論：事例は小さいですが、そこに結びつけられる反論は小さくありません。それぞれの物に正確に一つの場所を与える秩序は、それぞれの物が、それが属する正確に一つの観点を持つと主張します。しかし、物はむしろ樹木というより網状組織に似ています。ほとんどすべてが多くと関係し、どの連関（Zusammenhang）が重要かは問いによって変わります。それを許さない秩序は、そこにあるものを記述するのではなく、それについて決定します。秩序がうまく機能すればするほど、決定がなされたことに気づかなくなります。そしてこれは保管場所にだけ当てはまるのではありません。この本がこれから展開するあらゆる秩序も、自分の根拠を挙げることのできる秩序でさえ、それぞれの物に一つの場所を与えます。根拠づけられた秩序はそれゆえ最も危険でしょう。というのも、秩序を根拠づけられる人は、それを最も容易に事柄そのものと見なすからです。

応答：この反論には多くの正しい点があります。あらゆる秩序は選択し、その観点のどれにも現れないものは視界から落ちます。しかし、反論はそれがどこで示されるかを見落としています。書簡が「母」の下に欠けていることは、探すときに気づかれます。秩序がそもそも挫折しうるのと同じ経験においてです（第2.1章）。何かがうまくいかないのです。秩序が危険になるのは、それが選択することによってではありません。危険になるのは、秩序が自分の失敗にもはや気づかず、見つからないものが、第二の観点への手がかりではなく、存在しないものと見なされるときです。

このことから帰結するのは秩序の放棄ではなく、秩序のための条件です。秩序は残余（Rest）を見えるように保たなければなりません。それには費用がかかります。「母」フォルダから税金のファイルへの相互参照（Verweis）は、作成され維持されなければなりません。コピー機ができてからは、代わりにコピーをファイリングできますが、ファイルは膨れ上がります。一通の書簡が複数の場所に属することを、あらゆる記録係は知っていました。未解決だったのは、この洞察

が彼にどれだけの費用を許すかでした。それでどこまで行けるか、もはや固定の場所を割り当てない秩序までは、第9.3章で示されます。

同じことが、一つの順序で読まれるあらゆる叙述にも当てはまります。本には目次があり、目次は一つの系列しか知りません。事柄において並んで立つもの、交差するものは、紙の上では前後にならざるをえません。そして二つの場所に属するものは、一つの場所にあります。この本もそのように構成されており、記録保管と同じように助けます。他の章への相互参照によってです。そこには、自分自身の場所に余地がなかったものが属しています。

この節の反論の最も鋭い形は、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリによって見出されました。彼らは樹木（Baum）に根茎（リゾーム）を対置しました。幹のない根の網状組織であり、その中では各点が各点と結びつきうるのです。

3.4 系列が見えるようにするもの

この章のすべての秩序に共通するのは、観点が選ばれていることです。アルファベット、日付、分野、差出人は、人がそうやって探したいから分類する特徴です。秩序がそれによって事物に外側から付けられることは、秩序の利点であり代価です。

それでも、まさにそのような秩序が、誰も入れたのではない何かを示すことがあります。自分の郵便を何年もの間ただ日付だけでファイリングする人は、内容に一切目を向けずに、各年同じ時期に同じ書簡が来るのを、ページを繰ると見ます。春には税決定通知、夏には共益費の精算、秋には保険の掛金です。彼が選んだのは日付です。その中で何かが反復することは、彼が選んだのではなく、強制もできず、それは官庁、家主、保険が働く期限とリズム（Rhythmus）にあります。第3.2章の「その他」の区画も同様です。一年後、その中には一つの束があり、しばしば雑多に混ざってはいません。半分は職人からの書簡です。これも誰も区分（einteilen）したのではありません。それはおのずから示され、どの区画が欠けているかを語ります。

どちらの所見も同じ形をしています。選ばれた観点の中に、選ばれたのではなく、物から来る反復が示されます。それに従う秩序（毎年の期限のための区画、職人のための区画）は、もはや、人が事物に持ち込む特徴だけに従って分類するのではありません。秩序は、事物に見出される何かを受け入れます。そのような反復がパターン（Muster）と呼ばれます。

第4章 パターン

4.1 反復するもの

□□ 4: □□□□□□□□

この行の文字を一瞬、意味のない黒い線として、単なる線として見ることを試みてください。
それはほとんどうまくいかず、うまくいっても長くは続きません。線は文字に、文字は単語に、あなたが妨げる前にまとまります。認識しないことは、認識することより多くの努力を要します。

ここで押し寄せてくるのはパターンです。多くの事例で回帰し、それゆえ再認される形態（Gestalt）です。「a」はどの書体でも少しずつ異なって見えますが、それでもつねに「a」です。この能力は遠くまで届きます。隣人がいる人は、数週間後には、その人が平日は五時半ごろ、月曜日だけは七時ごろ帰宅することを知っています。それに注意しようと決めたことは一度もないのにです。メロディーを初めて聞く人は、二回目にはしばしばそれを先まで口ずさめます。

パターンは凝縮です（第1.3章）。十四の個別の帰宅時刻の代わりに、一つの規則を覚えます。平日は五時半、月曜日は七時とです。なぜそれが必要かは、それが欠けているところで気づかれます。二十の曲がり角からなる道順は誰も覚えません。パターンを尋ねます。「ずっと大通りに沿って、終わりで左」 (DE: „immer der Hauptstraße nach, am Ende links“)、そしてそれが見つからないところでは、書き留めるしかありません。

学問では同じことがより大きく見えます。ティコ・ブラーエが何十年にもわたって火星の軌道を集めた観測は、数千の角度と時点でした。ヨハネス・ケプラーはその中に一つの規則を見出しました。惑星は、一方の焦点に太陽が位置する楕円上を動くというものです。誰も頭に保持できなかった表から、表の各箇所を、以前のどの規則よりも正確に取り戻せる一文が生じました。

前章の秩序とは異なり、パターンは選ばれません。何に注意するか、隣人の帰宅時刻にであって上着の色にではない、ということは選べます。その観点の中で何かが反復するかどうかは、選択に依存しません。観点は選ばれたままですが、反復は見出されます。

4.2 見出されたものか、作られたものか

反論：パターンは外に横たわって認識されるのを待っているのではありません。初めてジャズを聞く人はノイズを聞きます。しばらくすると、リズム、回帰、応答を聞き、突然それは意味をなします。パターンは、彼が聞くことによって初めて生じました。人はパターンを認識することによってパターンを作り出します。

応答：ジャズで、それが正しいかを吟味できます。演奏家は一つの形式に従って演奏します。一定の小節数の後にテーマへ戻り、互いに応答し、テンポを保ちます。しばらくしてそれを聞く聴き手は、彼らが何をしているかを学んだのです。もし彼がパターンを作り出したなら、彼はそれを他のどんな物音にも聞き込めるはずです。それはうまくいきません。少なくとも同じ仕方では。雲の中に顔を見、ラジオのノイズの中に声を聞くことはできます。しかし、これらのパターンは継続できません。雲は、顔が次にするであろうことをしません。ノイズの中の声は、第二の文を言いません。それに対して、ジャズのパターンは継続できます。それを聞いた人は、テーマがいつ戻るかを知っています。

反論の正しい点は、パターンは学ばれるものであり、学ぶまでは聞こえないということです。また、聞く際の観点が聴き手から来ることも正しい。しかし、パターンが偽でありうることは、パターンが認識によって作られないことを示します。私の認識によってのみ存在するものは、何によっても挫折しえないでしょう。雲の中の顔は、次の一分によって挫折します。

ですから、パターンは単に存在するのでも、聴き手が作るのでもありません。観点は彼が持ってきます。回帰は事柄から来ます。そして両方が適合するかどうかは、次の小節が示します。

4.3 パターンが未決のままの場所

数列1、2、4。どう続くでしょうか。ほとんどの人は8と言います。数がそのたびに倍になるからです。しかし7も同じように合います。差が一つずつ、まず1、次に2、次に3と増えるからです。どちらの規則も、与えられたすべてを説明し、次の項で初めて分かれます。項が増えても根本的には助けになりません。あらゆる有限の系列には、それを続ける任意に多くの規則があり、事例だけではそれらの間で決定されません。

そこに築ける反論には、もう一つの側面があります。確定しているパターンも、新しいものに適用されると、それまでだったものにとどまりません。「家族」という言葉は、あらゆる使用で再認されます。しかし、その下に包摂される新しい事例、パッチワーク家族、二人の寡婦の共同生活は、その言葉の意味をずらします。それなら、パターン認識は根本的に不確かなもの、正しいものを認識したかを決して知らない認識ではないでしょうか。

不確かです。どんな方法もそれに変わりはありません。しかしそれから、規則の間で何も決定しないことは帰結しません。8が来るか7が来るかを知りたい人は、系列がどこから来たかを尋ねます。分裂するバクテリアを数えるなら、それは8です。トレーニング計画から来るなら、それは毎週、前の週より一歩多く上乗せするもので、7です。パターンは数だけから認識されるのではなく、数と、数が何についてのものかから認識されます。それも決定しないところでは、次の事例が決定します。そのとき学び直す人は、パターンを失ったのではなく、初めて見出したのです。言葉でも同様です。「家族」がずれることは、新しい事例が争いを引き起こすことによって気づかれます。この場所で、パターンは自分を吟味します。

それゆえ、パターンは、次の事例で実証されなければならない先取り（Vorgriff）であり、確定ではありません。

反論の第一の姿は、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの規則遵守についての考察から、第二の姿は、ジャック・デリダの反復可能性の思考から知られています。反復される記号は、新しい連関のそれぞれで少しだけ別のものです。

4.4 粗すぎる、細かすぎる

パターンは、凝縮すべきものを二通りの仕方で外しえます。粗すぎることがあります。隣人が平日五時半に来ると覚えていた人は、二週間の間、暗い窓に驚き、その後に休暇だと気づきます。細かすぎることがあります。あらゆる帰宅時刻を分単位で覚える人、17時28分、17時34分、17時31分は、一つの規則の代わりに十四の数を持ち、以前と同じくらい賢いだけです。

両者の間には、一度きりで確定できる中間はありません。パターンがどれだけ粗くてよいかは、何のために必要かによります。隣人にお願いをしたい人には「夕方ごろ」で十分です。小包を渡したい人には半時間が必要です。これは再び第1.4章の第一の基準、凝縮するための問いです。パターンは、自分の問いのために、問いが要求するだけを保持し、もはや支えない箇所では、それとわかる仕方で挫折するとき、良いパターンです。

4.5 パターンが挫折するもの

隣人は月曜日七時に来ます。なぜでしょうか。ひょっとすると月曜の午後に会議があり、ひょっとすると月曜にスポーツへ行き、ひょっとすると母を訪ねます。それが重要でない限り、それはどうでもよいことです。パターンは、説明できなくても支えます。しかし、何かが変わるとすぐに重要になります。彼が仕事を変えれば、会議はなくなり、それとともにパターンもなくなります。スポーツはなくなりません。パターンが引き続き当てはまるかは、なぜそれが当てはまるかを知る人だけが知っています。

この部のすべての秩序の限界はそこにあります。観点は何に注意するかを言い、系列と区画は何がどこに属するかを言い、パターンは何が回帰するかを言います。それらのどれも、なぜそうであるかを言いません。パターンは、事柄において見出されるので、最もそれに近づきます。しかし、パターンは、何かが反復するということだけを言うのであり、それゆえ、どんな条件の下でそれが終わるかを言えません。

4.6 第Ⅰ部の回顧

なぜこの部はまさにこれらの段階を持ち、なぜこの順序なのでしょうか。

あらゆる秩序はこれをあのもののところへ置きます。そのために、秩序は何か、それが見るものを必要とします。それゆえ観点が初めにあります。観点はあらゆる秩序の条件であり、観点なしには配列しかありません（第2.1章）。観点を用いる最も単純な仕方は、それに従って分類することです。一つの特徴に従って、そして一つの特徴では足りないところでは、複数の特徴に従って、互いに入れ子にしてです。それが系列と区画における秩序です。それは事柄から特徴だけを取り、他のすべてを外に置きます。しかし、事柄そのものにおいて、あるものが回帰することが示されます。秩序がこの回帰に従うところでは、秩序はもはや単に持ち込まれたものではありません。それがパターンです。

この順序は、事柄にますます近づく秩序の順序です。観点は選ばれ、系列は選ばれた観点に従い、パターンはその中で見出されます。順序を逆にすることはできません。というのも、各段階は前の段階を前提しているからです。パターンは観点における反復であり、系列を形成する人はすでに観点を持っています。

反論：子どもは、分類したりアルファベットで探したりするずっと前にパターンを認識します。順序は逆です。

応答：順序は学習の歴史ではなく、依存の順序です。パターンを認識する子どもも、何かに注意しています。母の声にであり、交通のノイズにではありません。この観点なしには、その子にとって反復するものは何もないでしょう。その子がそれを選んだのではなく、持って生まれたということは、それに変わりはありません。そして、パターンがアルファベットより早く学ばれることは、見出された秩序が持ち込まれた秩序より古いことを示すだけです。秩序が事柄についてどれだけ知っているかという問いにとっては、それはどうでもよいことです。

三つの段階すべてに共通するのは、何が一緒に属するかを言い、なぜかは言わないことです。それによって、それらは、難しい事例でだけでなく、あらゆる変化において挫折します。何かがなぜ一緒に属するかを知らない人は、状況（Umstand）が変わるとき、それが一緒にとどまるかを知りません。第二部はそれを問います。

第2部 なぜそれが互いに属しているのか

第5章 原理

5.1 パターンを生み出すもの

誰かがシャワーを出し、水が冷たいので、暖かくしようとひねります。水は冷たいままで、彼はさらにひねります。すると今度は熱くなり、熱すぎるので、彼は戻し、しばらくするとまた冷たすぎます。三、四回繰り返した後、彼は望んでいた温度に達します。これはパターンです。熱すぎると冷たすぎるの間の振動であり、初めて使うシャワーのたびに繰り返されます。

なぜ振動するのでしょうか。なぜなら、彼が今混ぜている水は、数秒後にしかシャワーヘッドから出てこないからです。彼は自分が感じるものにしたがって調整しますが、感じるのは数秒前の水です。各修正は遅れて届くため、目標を超えてしまいます。ここで、そのパターンを生み出すものとして、測定と設定の循環が挙げられます。その循環では、ある設定の結果が遅れて測定者に届きます。このような遅れを伴う循環が働き、遅れが許す以上に強く修正する場合、同じ振動が生じます。センサーが間違った場所にある暖房は、加熱しすぎ、その後冷えすぎます。農家が今日の価格に合わせて生産を調整し、その価格が一年後にしか結果をもたらさない市場は、豊作の年と不作の年を生み出します。

パターンを生み出すものは、ここでは原理と呼ぶことにします。ラテン語で始元、起源を意味する語にちなみます。原理もまた一つの凝縮ですが、パターンとは別の種類のものです。パターンは多くの事例を一つの規則にまとめ、原理は多くのパターンをそれらが生じる根拠にまとめます。シャワー、暖房、市場はそれぞれ異なるパターン、異なる時間、異なる振れ幅を持ちます。原理はそのすべてで同じです。

5.2 一般化と原理

あらゆる一般的な文が原理であるわけではありません。「練習が名人を作る」 (DE: „Übung macht den Meister“)は多くの経験をまとめて

おり、たいてい当たっています。しかし、それはなぜ練習が効果を持つかを言わず、それゆえ、練習がいつ効果を持たないかも言いません。間違ったことを練習するとき、フィードバック（Rückkopplung）なしに練習するとき、過労で練習するときです。それは一般化（Verallgemeinerung）であり、大きな範囲のパターンです。

それに対して、遅れたフィードバックの原理は、どの条件の下で振動が現れ、どの条件下で現れないかを言います。結果が遅れなしに届くなら、何も振動しません。短い配管のシャワーの前に立つ人は、一度で温度を合わせます。より小さな段階で調節し、待つなら、振動は弱くなります。ですから、原理は何が起こるかを言うだけでなく、別様に起こるために何を変えなければならないかも言います。そして、原理は、見たことのない事例に適用できます。それを理解した人は、観察する前に、長い遅れのある調節器で振動を予期します。

原理はさらに多くを言います。修正が偏差に逆らってではなく、その方向に働くなら、何も振動せず、それは高まっていきます。自分のスピーカーを拾うマイクは、ますます大きく鳴ります。他の人が預金を引き出すから自分も引き出す銀行は、支払不能になります。同じ測定と調節の循環が、方向に応じて二つの対立するパターンを生み出します。そして、方向によって、どちらが起こるかを事前に言えます。

第4.1章の惑星軌道のパターンは、同じ仕方で自分の根拠を見出しました。惑星が楕円上を動くことをケプラーは確定しました。なぜかは、一つの原理が初めて言いました。その原理は、落ちる石と潮汐をも説明しました。距離の二乗に従って減少する質量の引力です。そこからケプラーの楕円が帰結し、さらに多くが帰結しました。すなわち、楕円は完全には正確でないこと、なぜなら惑星は互いに乱し合うからです。

このことによって、原理を一般化から区別できます。一般化は、既知の事例で何が同時に生じたかを言います。原理は、何がそれを生み出すか、それゆえどこでそれが終わるかを言います。

5.3 原理がすべてを説明するとき

ある人が匿名で収入の大部分を寄付します。効用最大化による説明はそれに苦労しません。彼は寄付から、金からよりも多くの満足を引き出します。別の人は財産を持たない隠者として暮らし、自らの平穏を最大化します。第三の人は見知らぬ人のために命を捧げます。彼にと

って、正しく行動する感情がより重くありました。原理は毎回当てはまります。

反論：このことから、あらゆる原理探求に対する反論を築けます。すべての事例で実証される原理は、新しいものを既知のものに還元することで説明します。既知のものの変形に見えないものは、そう見えるまで解釈し直されます。しかし、現実性（Wirklichkeit）は絶えず新しいものを生み出します。以前は可能に見えなかった行為、生活形態、理念をです。まさにそのために、原理の探求は盲目にすると、この反論は言います。

応答：反論は当たっていますが、特定のものに当たっています。本章の初めの遅れたフィードバックは、遅れが長すぎる制御ループ（Regelkreis）が振動し始めると予告します。それは吟味でき、それが起こらないところでは、説明は正しくありません。寄付者、隠者、救助者を等しく説明する形の効用最大化は、どんな人間によっても挫折しえません。それは、誰が何をするかを言わず、後から、その人が何をしたかを解釈します。原理は、自分が排除する事例の分だけ役立ちます。もはや何も排除しないなら、それはもはや原理ではなく、言い回しです。

これによって、新しいものには認識のしるしがあります。新しいものは、実証された原理が挫折するものです。挫折しうる原理を探す人は、新しいものに対して盲目にはなりません。その人こそが、そのための感覚器官を持っています。

学問はこの歩みを知っています。天王星の軌道が質量の引力が要求するものからずれたとき、人々はもう一つの未知の惑星を仮定し、それがどこにあるべきかを計算し、そこで海王星を見出しました。水星の軌道がごくわずかな量だけずれたとき、人々は同じことを試み、今度は何も見つかりませんでした。ずれは、新しい重力理論がそれを説明するまで残りました。ずれが見えたのは、古い原理が、それによって挫折するのに十分なほど正確だったからにすぎません。

新しいものは、既知のものの変形としてではなく、固有の権利の差異として考えるべきである、というのがジル・ドゥルーズの差異と反復の指導的思考です。

5.4 原理が挫折するもの

原理は、なぜ長い配管のシャワーが振動するかを説明します。このシャワーが今朝振動するかどうかは言いません。そのためには、配管が

どれだけ長いか、栓がすでにどれだけ開いていたか、浴びる人が辛抱強く待つか急いで回すか、温水タンクが満杯かを知らなければなりません。原理は普遍的（allgemein）です。事例はこのものであり、そこで起こることは、原理とその条件（Bedingung）に依存します。

ここに原理の欠陥、その強さの裏面があります。原理は条件から捨象するので、多くの事例で当てはまります。条件から捨象するので、どの事例も完全には説明しません。ここで、今、起こったことがなぜ起こったかを知りたい人は、原理と条件を一緒に必要とします。両方を合わせて根拠（Grund）と呼ぶことにします。

第6章 根拠

6.1 空虚、任意、十分

鉢植えが枯れました。なぜでしょうか。

最初に浮かぶ答えはこうです。それは生命力がなかったのです。これは根拠のように聞こえて何も言いません。「生命力がない」は、ただ、それが枯れたことを別の名前で言っているだけです。このような答えは、思われているより頻繁です。誰かが、圧力に耐えられなかったから失敗したと言う人は、しばしば同じことを二度言っただけです。事柄を単に反復するだけの根拠は空虚（leer）です。

第二の答えは別のことを挙げます。水をやらなかったのです。これは何かを言いますが、十分ではありません。隣のサボテンも水をやらず、生きています。そして、隣人の鉢植えは水をやりました。毎週です。それでも枯れました。鉢に穴がなく、根が水に浸かっていたからです。水をやらなかったことは、他の条件のうちの一つであり、それを取り出す人は、一つの条件を取り出したのであり、なぜまさにこれかを言いません。一つの条件を全体のためのものと取る根拠は任意（beliebig↑）です。

第三の答えは条件をまとめます。この鉢植えは毎週水を必要とします。八月に南向きの窓に置かれ、そこでは土が三日で乾きます。三週間、誰も水をやる人がいませんでした。ここでは何も取り出されておらず、第二の答えが飛ばしたものが属しています。それがどんな鉢植えかです。サボテンなら、同じ三週間を耐えたでしょう。なぜならサボテンだからです。事柄自身の性状（Beschaffenheit）は一つの条件であり、しばしば最も重要なものです。すべての条件を、事柄を含めてまとめる根拠は、十分（zureichend）と呼ばれるべきです。

空虚、任意、十分。各段階は前の段階の欠陥を取り除きます。空虚な答えは何も新しいことを言いません。任意の答えは何かを言いますが、十分ではありません。十分な答えは、起こったことが起こるために何が一緒にならなければならなかったかを言います。

6.2 十分さの量

反論：十分な根拠は到達不可能です。条件には、太陽が輝いたこと、地球が回転していること、そもそも鉢植えが存在することも属します。すべての条件を挙げようとする人は終わりに達しません。

応答：何かがそもそも起こるためのすべての条件を挙げなければならないなら、終わりに達しません。しかし問われているのは、なぜこの鉢植えが枯れたかです。それはつまり、なぜそれが、前の夏のように、隣のサボテンのように生きなかったかです。両方の事例で同じだった条件は、差異を説明しません。太陽は前の夏にも輝きました。十分な根拠とは、比較する相手の事例と比べて、一方の事例で何が異なっていたかを示すものです。それは有限であり、吟味できます。誰かが水をやるか、鉢植えが北向きの窓に置かれていたなら、それは生きていたでしょう。

これによって、十分な根拠は、どの事例と比較するかという問いに依存します。そして、問いはたいていそのように意図されています。鉢植えがなぜ枯れたかを問う人は、ほとんどいつも、予期していたものとの違いで意味しています。別の比較を意図する人は、別の根拠を得ます。どちらかが偽であるわけではありません。偽となるのは、両方の事例で同じだった条件を、差異の根拠として提示することだけです。

6.3 推論

根拠づけの一つの形式は、非常に古く、非常によく知られているので、しばしば根拠づけ一般と見なされます。推論（Schluss）です。すべての人間は死ぬ。ソクラテスは人間である。ゆえにソクラテスは死ぬ。最初の二つの文を認める人は、第三の文も認めなければなりません。

推論は、最初の文が正しいかどうかについては何も言いません。推論が保証するのは移行（Übergang）であって、出発点ではありません。それゆえ、推論は十分な根拠の隣にある独自の根拠の種類ではなく、十分な根拠を書き留める際の形式です。この鉢植えが毎週水を必要とし、三週間水を得なかったなら、それは枯れました。この「ならば」は、「もし」が完全であれば確実です。それが完全かどうかは、推論は言いません。それを吟味することが、根拠づけを単なる帰結から区別する仕事です。有効な推論も、その最初の二つの文を結びつけ

る肢節が事柄を捉える場合にのみ根拠づけます。バラは赤い、赤いものはすべて美しい、ゆえにバラは美しい、と推論する人は、有効に推論しています。「棘がある」を結びつける肢節として、彼は同じように有効に対立物に達するでしょう。事柄が単に持ち合わせている肢節は、別の姿をした第6.1章の任意の根拠です。

6.4 根拠が誰に仕えるか

ある治療が効かず、病院は記します。患者は薬を処方通りに服用しなかった、と。それは正しい。記されないのは、彼が交替勤務者であり、錠剤を一日三回空腹時に服用すべきだったこと、それが彼の勤務と両立しなかったことです。挙げられた根拠は真であり、まさに病院を免責する根拠です。

反論：このことから、根拠づけの技術全体に対する反論が帰結します。根拠は、それを与える人々によって選ばれ、彼らには利害があります。根拠づけは、形式的に申し分なく、事実に基づいていても、どの事実が重要かを選ぶことによって、支配に仕えることがあります。体系的に根拠づける人は、そうなる道具を洗練するだけだと、この反論は言います。

応答：この点には二つの正しいことがあります。根拠の選択はそれ自体、吟味されなければならない行為です。そして、この吟味には、根拠が誰の役に立つかという問いが属します。しかし、この例で欠陥が見えたのは何によってでしょうか。さらなる根拠、勤務計画によってです。病院の根拠づけに対する批判は、それ自体が根拠づけであり、しかもより完全なものです。批判は、錠剤が誤って服用されたことを否定しません。批判は、それがどんな条件の下で起こったか、誰がそれを変えられたかを示します。

この章の言葉で言えば、病院は任意の根拠、真の条件を一つ取り出して与えました。そして選択は、病院が痛くないところに落ちました。根拠が誰かに仕えるという疑いは、根拠づけを終わらせないのです。それは根拠づけに一つの委託を与えます。欠けている条件を探すことです。それが批判するものへと転じるのは、この委託を断り、根拠の効用からその虚偽を推論するときだけです。

理性そのものが支配の道具になりうることは、マックス・ホルクハイマーとテオドール・W・アドルノが啓蒙の弁証法で展開しました。

6.5 事柄の中の根拠

鉢植えが枯れた条件の中には、他のものとは別種のものがありました。それがどんな鉢植えかです。南向きの窓、八月、水やりなしの三週間は状況（Umstand）です。それらは別様でもありえ、鉢植えは同じだったでしょう。それが毎週水を必要とすることは状況ではありません。それは鉢植えに属し、それが変われば別の鉢植えです。

これによって、第2.2章が未決のままにしなければならなかったことを果たせます。そこでは、残りが依存するものが本質的であるとされましたが、「依存する」が何を意味するかは未解決のままでした。今それを言えます。あるものは、他のものがその根拠の中にあるとき、他のものに依存します。事柄にとって本質的なのは、事柄自身に属し、その状況に属さない根拠の部分です。本ではテクストでした。テクストから、読者にとっての内容、構成、価値が帰結します。どの表紙に入っていてもです。そして、第2.2章の第二の未決の問い、事柄を何として取るかという問いにも答えが与えられます。人は、その根拠を探すものとして事柄を取ります。読者は、本が自分に与えるものの根拠を探し、テクストを見出します。収集家は、この一冊の価値の根拠を探し、その中に表紙を見出します。

6.6 個別の根拠が挫折するもの

単一の出来事の根拠を問う限り、条件をまとめて持っていれば十分です。多くものの根拠を問うとなると別です。なぜこの鉢植えが葉、茎、根を持ち、まさにこれらなのか。なぜそれに二十の品種があるのか。なぜ春に芽吹き、秋に枯れるのか。ここでは一つの出来事を説明すべきではなく、一つの全体を説明すべきであり、根拠はもはや一連の条件ではなく、事柄そのものがそれであるものです。自らを維持するために光、水、土を必要とする生物（Lebewesen）です。そこから部分が、品種が、季節が理解可能になります。

このような根拠は、もはや単に外側から秩序づけるのではなく、もはや単に回帰するものを確認しません。それは一つの全体を、それがそれであるものから分節します。これがどのように起こるか、何通りの仕方で起こるかを問うのが第三部です。

6.7 第Ⅱ部の回顧

なぜまさに原理と根拠がここにあり、なぜこの順序なのでしょうか。

第Ⅰ部は、何かがなぜ一緒に属するかという問いで終わりました。この問いは二つの段階で答えられます。パターンをそもそも何が生み出すか、それがどこに現れるかに関わりなく挙げることができます。原理です。そして、なぜそれがここで今現れたかを挙げることができます。原理をその条件とまとめる根拠です。順序を逆にすることはできません。というのも、十分な根拠は原理を自分の条件の一つとして、事柄の中にあるものとして含んでいるからです。それに対して、原理は個別の事例を必要としません。

反論：人はまず個別の事例の根拠を問うではありませんか。なぜ私の鉢植えが枯れたのか、そして後になって初めて、もしもそうするなら原理を問うのではありませんか。

応答：人はそう問います。そして、そう進まなくてよいのです。この部の順序は、第Ⅰ部と同様、依存の順序です。枯れた鉢植えの十分な根拠を挙げる人は、それが毎週水を必要とすると言います。それがその種の原理です。彼がそれをそう呼ぶかどうかに関わりません。個別事例の根拠はより豊かな構成物であり、それゆえ二番目に位置します。

両方の段階は、何かがなぜ一緒に属するかを言います。しかし、どちらも、多くの肢節から成る一つの全体がどのように構築されているかを言いません。その肢節はすべて同じ根拠から理解可能になるべきものです。そのためには、もはや個々の事例を説明するのではなく、一つの全体を分節する秩序が必要です。

第3部 一つの全体がどのように構成されているか

この部が扱うこと、つまり対象をどう区分するか、種類をどう区別するか、分節をどう吟味するかは、かつては学校で教えられる内容でした。何世紀にもわたって教えられてきた論理学には三つの部分がありました。概念論、判断論、そして推論論です。第一の部分は、定義、区分、そして類と種の関係を扱っていました。

この教説は消えてしまいました。しかもそれは、反駁されたからではありません。それは、どちらもそれを引き継がない二つの後継者の間ですり潰されてしまったのです。集合論は集合をその要素によって規定します。それは正確で強力であり、秩序の規定を含んでいません。任意の物の列挙は他の集合と同じく一つの集合であり、ある区分が事柄に適っているかどうかは、この言語では問うことができません。形式論理学は、文の結合において、古い論理学が持っていたすべてよりもはるかに精緻に発展しています。しかしそれは、完成した概念を伴う完成した文から始まります。見通しのきかない対象から、それを使って後に計算できるような概念がどのように生じるかは、その対象ではありません。

両者の中間に、ここで問題となる作業があります。それは形式化できませんが、任意ではありません。より良い分節とより悪い分節があり、それがどこに現れるかは示すことができます。

一つの全体は複数の仕方で問いただすことができます。それぞれの問いは異なる分節をもたらします。第一の問いは、第1部がすでに知っていたもの、つまり分類することに最も近いところにあります。どのような種類があるのか、という問いです。

第7章 種



図 1: 種の記号：三つの分かれた形態、枠なし。それらの間の間隔が意味を担う。

7.1 クジラ

長い間、クジラは魚と見なされていました。水中に住み、流線形とひれを持ち、泳ぎます。今日では哺乳類と見なされています。空気を呼吸し、恒温で、生きた子を産み、乳を与えます。両方の区分は特徴に従って形成されています。なぜ第二の方が良いのでしょうか。

かつてクジラを区分した特徴は、生息環境にかかっています。水中に住み速く動くものは、魚、哺乳類、鳥のいずれであっても、流線形になります。ペンギンもそれを持っています。このような特徴は状況の結果であり、それゆえ全く異なる動物に現れます。今日クジラを区分する特徴は一緒に現れ、しかも偶然ではありません。暖かい血、肺呼吸、子への哺乳は、クジラが、その先祖である陸上動物と共有しています。クジラは、先祖が水中へ入ったとき、それらがそこではむしろ邪魔なのに、保持したのです。それらは状況から帰結するのではなく、クジラがそれであるものから帰結します。

これによって、第6.5章が見出したことが再び取り上げられます。良い区分は、事柄の根拠に属するものに従って分け、その状況に属するものには従いません。クジラは、誰かが別の観点を好んだから再区分されたのではなく、どの特徴がどの特徴から帰結するかが示されたからです。これが第3章の区画による秩序との違いです。そこでは特徴は選ばれました。ここでは特徴は探され、したがって外すこともありえます。

種による秩序は分類（Klassifikation）↑と呼ばれるべきです。その問いはこうです。どんな種があるか。その肢節は並んで存在し、互い

に排除し合い、互いから生じません。犬は哺乳類の一種であって、その一段階ではありません。

7.2 正しく、そして良い

区分には、第3.2章で区画がすでに知っていた規則が当てはまります。一つの段階の中で特徴が変わってはいけません。一段階の種は互いに排除し合い、合わせて、区分されるすべてを覆うべきです。これらの規則に与えうる最も厳格な形は、二分法（Zweiteilung）です。一つの全体を一つの特徴に従って、それを持つものと持たないものに分け、それぞれの半分を再びそう分けます。物体的なものと非物体的なもの、物体的なものを、有生のものと無生のものに、有生のものを、感覚するものと感覚しないものに分けます。二分法は隙間がありません。一方でないものは他方です。

二分法には代価があります。それはあらゆる対象を、イエス・ノーの決定の連続に強制します。そのように構築されている対象はごく少数です。そして二分法は不均等です。一方の半分は一つの特徴によって規定されていますが、他方はその欠如によってだけです。「感覚しない」は、物が何であるかを言わず、ただ何が欠けているかを言うだけです。そして、単にそのように区分されたものは、残余として扱われがちです。生物学が今日行う生物の区分は、この代価を払いません。生物学は二つにではなく、存在するだけの数の肢節に分けます。一つの目は任意に多くの科に、一つの科は任意に多くの属に分かれます。そして、生物学は特徴を段階ごとに変えます。一段階で区別するものは、次の段階ではもはや区別せず、そこで分けるものは、上ではどうでもよかったのです。これは規則を破っていません。というのも、個々の段階では特徴は同じままです。それは対象に適応します。生物には、すべての段階で分ける単一の特徴はなく、それを強制する人は、形式的に正しく、何も説明しない区分を得ます。

このことから、正しい区分と良い区分の違いが示されます。正しい区分とは、肢節が互いに排除し合い、全体を覆うことです。良い区分とは、境界が、対象自身が差異を作るところを通り、つまり特徴が単に分けるだけでなく、何かを捉えることです。本を色で秩序づける人は、各本が一つの色を持つ限りで正しく区分しており、本については何も捉えていません。

その背後には、区分を越えて届く何かがあります。一つの規定（Bestimmung）は、それが排除するものによって、それであるもの

です。「哺乳類」は、哺乳類でない動物がいるからこそ、何かを意味します。それゆえ、区分は、何かが他なるもの（Anderes）であるようになり始める場所に境界を引く試みです。そして、論理的誤りを含むことなく挫折します。境界を、事柄が境界を持たない場所に引くときです。

7.3 対象が境界を引かない場所

オレンジはどこで終わり、赤はどこで始まるのでしょうか。純粋な黄から純粋な赤まで、隣とほとんど区別できない百の色調を並べてください。どこかで線を引かなければならず、どの線も根拠づけられなければなりません。なぜここで、一色先ではないのか。言語はそれを異なって引きます。オレンジのための独自の言葉を全く持たない言語もあります。

反論：このような移行は色にだけあるのではありません。丘と山の間、子どもと大人の間、ある種と、そこから由来する種の間には線ではなく経過があります。ここでクラスを作る分類は、対象の中に現れない境界を引き、あらゆる物をこちらの側かあちらの側に強制します。分類は経過に暴力を振るい、その暴力を秩序として提示します。

応答：前節の規則はすでに答えを含んでいます。良い区分とは、その境界が、対象自身が差異を作るところを通るものです。対象が差異を作らないところには、二つの誠実な道があります。境界を合意として標示できます。成年になるのは十八歳で、その日に何かが起こるからではなく、どこかに境界が必要だからです。あるいは、物ではなく度（Grad）を分類します。分類が不誠実になるのは、合意された境界を、あたかも見出されたかのように扱うときだけです。

それゆえ、境界事例は分類することを反駁しません。境界事例は、対象がどこで切断しないかについての情報を与えます。そして、境界事例が群がるところでは、区分がこの箇所で合意であることがわかります。

この問題は古いものです。ギリシア人はそれを積み重なりの誤謬（Trugschluss）として知っていました。取り除く一粒の穀物も、積み重なりを非積み重なりにするのではなく、それでも最後には何も残りません。

7.4 区分することがやまないとき

区分することを学んだ人は、それをやりすぎることがあります。彼は友人と散歩し、友人が語る間、彼は一緒に分類します。今は仕事、今は家族、今は両方です。彼は位置づけるために聞き、友人が言いたいことは、そのどのクラスにも合わないので、彼には失われます。分類はここでは、自分が仕える問いをもはや持っていません。分類は、できるから秩序づけます。

区分への強迫には理解できる根拠があります。あるものをある種に割り当てられる人は、それから何を期待できるかを知っています。それに対して、分類されていないものは不安にさせます。しかし、種が供給する期待は、種と同程度にしか良くありません。三つの文の後に人をある種に割り当てた人は、四つ目からは、その種に合うことだけを聞きます。「これがどんな事例かわからない」 (DE: „Ich weiß nicht, was für ein Fall das ist“)という文は、それゆえしばしば理解の始まりであり、その挫折ではありません。

7.5 種が挫折するもの

クジラが哺乳類であると知っている人は、クジラについて多くを知っています。空気を呼吸すること、子に乳を与えること、暖かい血を持つことです。その心臓がどう働くか、肺がどういう性状か、どうやってそんなに長く息を止められるかは、それによってまだ知りません。種は、クジラが他と何を共有し、何において他と異なるかを言います。種は、クジラがどのように構築されているかを言いません。

これが分類の限界です。その肢節は並んで存在し、それぞれがそれ自体で一つの全体であり、区分はそれらの間の関係（Verhältnis）に関わり、個々の内部には関わりません。心臓は犬の部分であって、犬の種ではありません。個々の物がどのように構築されているかを知りたい人は、別の問いを立てなければなりません。それは何から成るのか、です。

第8章 部分



図 2: 部分の記号：唯一の閉じた形態、内部で区分されている。

8.1 自転車の二つの分解

自転車は二通りの仕方で分解できます。素材に従って分解できます。鋼、アルミニウム、ゴム、プラスチック、サドルの少しの革です。この分解は完全であり、あらゆる断片は一つの素材に該当し、資源ごみ置き場にとっては正しい分解です。しかし、自転車が何をするかに従っても分解できます。フレームは支え、二つの車輪は転がり、駆動装置は脚の力を伝え、ブレーキは止め、ハンドルは操舵します。この分解も同様に完全であり、自転車を理解したい、修理したい人にとっては正しい分解です。

第二の分解は、第一の分解に欠けているものを持っています。それは、なぜまさにこれらの部分なのかを言います。人間が自分の力で動かす乗り物は、人間を支え、転がり、力を伝え、止まり、操舵できなければなりません。その一つが欠ければ、それは使える自転車ではありません。ブレーキのない車輪は危険であり、ハンドルのないものは次のカーブへまっすぐ突っ込みます。部分は、全体が何のためにあるかから帰結します。それに対して、素材による分解は、自転車について、鉄くずの山にも当てはまることしか言いません。

部分による秩序は、合成を意味するラテン語から構成（Komposition）と呼ばれるべきです。テクストが問題になるところでは、たいてい分節（Gliederung）と言われます。その問いはこうです。それは何から成るのか。種とは異なり、部分はそれぞれが一つの全体ではあ

りません。部分は唯一の全体の肢節であり、その中でのみ、それであるものです。どの自転車にも付いていないハンドルは、何も操舵しません。

8.2 分節を良くするもの

同じ区別があらゆる分節に当てはまります。大きなテーマについて講演をしなければならない人は、歴史に従って、分野に従って、応用に従って、論争問題に従って分節できます。これらの分節のそれぞれは可能ですが、それぞれがテーマに対する別の問いを立てます。どれが正しいかは、まず講演が何を成し遂げるべきかに依存します。これは再び第2章の観点です。しかし、これらの分節のそれぞれの内部には、より良いものとより悪いものがあります。分野による分節で、分野を列挙するだけのものは、その領域がなぜまさにこれらの部分に分かれるかを示すものより劣っています。

部分の数は、丸い数への願望ではなく、事柄が決めます。自転車は、果たすべき課題の数だけ部分を持ちます。身体は、必要とする働きの数だけ器官を持ちます。講演をどうしても三つの点に分けたい人は、三つの点は覚えやすいからという、聞き手の根拠であって事柄の根拠ではないものを持っています。それは正当でありえます。ただ、テーマについての情報と混同されるべきではありません。

8.3 分節が、分節されるものより重要になるとき

分節することもやりすぎることがあります。講演を準備し、内容についてではなく、三つか四つの主要点であるべきか、節3.2.1は3.1.2の方が良くないかを何時間も考える人は、分節を、分節されるものから切り離しました。分節は目に見え、提示でき、吟味でき、改善できます。思考は、とりわけそれが書くときに初めて生じることが多いので、捉えにくいものです。それゆえ、分節への取り組みは、思考への取り組みからの心地よい逃避です。

対抗手段は単純で居心地が悪いものです。まず内容を展開し、分節を内容から得ることです。内容から生じる分節には、内容が断絶を持つところに断絶があります。それが分節の利点です。内容の前に確定していた分節は滑らかで、内容について何も語りません。

8.4 専門書の分節

専門書は唯一の系列を持つ構成です（第3.3章）。書き手が並べて見るものを、読者は次々に読まなければなりません。その部分は章であり、各章は、ブレーキが走行から帰結するように、全体から帰結する一つの課題を持つべきです。省いても思考の歩みに何も欠けない章は、部分ではなく付属物です。

専門書の分節では、三つの誤りが非常に規則的に回帰するので、パターンとして認識できます。それらは、テクストが大量にかつ急速に生まれるところで、そしてプログラムがそれらを書くところで最も多く群がります。第一は、各章の同じ設計図です。導入、概念の明確化、長所と短所を持つ三つの下位種、反論、解決、移行です。このような設計図は内容の前に確定しており、内容について、自転車の素材による分解と同じことを語ります。各章は、それが何についてかに関係なく、そこに収まります。第二は、移行の場所にあるリストです。三つの点を並べる人は、第二の点が第一の点からどう帰結するかを言う必要がありません。そして、まさにこれらの移行が議論だったはずです。第三は予告です。段落は、章が何を示すかを示す代わりに言い、終わりには別の段落が、章が何を示したかを言います。

対抗試しは自転車と同じです。各章について、なぜそれがこの場所にあり、次の章に何を引き渡すかを言えるか。各移行について、前のものが何によって挫折したか、何を未決にしたかを言えるか。言えるなら、分節は内容から得られています。言えないなら、分節は内容に被せられており、読者は遅くとも、第二の章と同じに見える第三の章で気づきます。

8.5 分解が挫折するもの

ハンドルは自転車でしか操舵しません。しかし、自転車も、道路の上で、踏み、操舵し、制動する人間が乗って初めて走ります。ブレーキは、道路との関係（Verhältnis）において初めてその課題を持ち、道路の勾配と濡れが、ブレーキがどれだけ強く効かなければならないかを決めます。そしてサドルは、この人間に合わせて調整されています。別の人間には、より高くまたは低く必要です。自転車の部品は、一つの全体の部品であり、その全体は、それ自体が他のものとの結びつきにおいてのみ、それであるものです。

同じ部分は、さらに複数の全体に属しえます。心臓はこの身体の部分であり、移植後は別の身体の部分です。社員は自分の部署、家族、クラブの部分であり、それぞれの中で別の部分です。全体の分解は、それが何から成るかを言います。それが、その部分が何と連関しているかは言いません。次の秩序がそれを問います。

第9章 連関

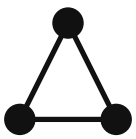

図 3: 関連の記号：線で結ばれた複数の形態。

9.1 すべては連関している

別の都市で新しい仕事を提示された人は、仕事だけを考えません。家族のことを考えます。一緒に引っ越すか留まるか、新しい都市の家賃、友人、子どもの学校、通勤路、年を取っていく両親をです。これらの結びつきのそれぞれは現実的であり、それぞれはまた別のものと連関しています。家賃は立地に、立地は通勤路に、通勤路は子どものために残る時間にかかっています。

このような結びつきに従う秩序は、関係を意味するラテン語から関係（Relation）↑と呼ばれるべきです。その問いはこうです。それは何と連関しているか。それは種でも部分でも秩序づけず、糸を結びます。その網が秩序です。

この秩序の困難はすぐに示されます。結びつきは限りなく多く、すべては何かしらすべてと連関しています。仕事について決めたい人は、あらゆる結びつきを追うことはできません。どの結びつきが支えるかを知らなければなりません。そのためには、結びつきを、それらがどう連関しているかに従って区別することが助けになります。

9.2 連関の三つの種類

ある結びつきは単に観察されたものです。教育が多い人は平均してより多く稼ぎます。数字はそれを示します。なぜかは示しません。教育がより高い所得を可能にするかもしれません。両者が共通の原因、たとえば、より長い教育もより良い仕事も容易にする出自を持つかもしれません。このような連関は事実的（faktisch）と呼ばれるべきです。それは現実的ですが、それがどう成立するかを言いません。

別の結びつきは結果（Wirkung）です。配管の遅れがシャワーを振動させます（第5.1章）。利子が信用を高くし、高い信用が住宅建設を抑制します。このような連関は機能的（funktional）と呼ばれるべきです。それは何が何に作用するか、それゆえ介入するときに何が変わるかを言います。

さらに別の結びつきは、物がそれであるものの中にあります。買い手と売り手は、一方が他方なしには、それであるものでないがゆえに連関しています。買う人は誰かから買います。このような連関は概念的（begrifflich）と呼ばれるべきです。それは観察される必要も、引き起こされる必要もありません。事柄を理解する人は、それとともにそれを理解します。

三つの種類は容易に混同され、関連思考（Beziehungsdenken）におけるほとんどの誤謬推論（Fehlschluss）はそのような混同です。教育のある人がより多く稼ぐという数字から、教育が所得を高めると推論する人は、事実的連関を機能的連関と見なしました。彼は正しいかもしれませんが、それを証明していません。

9.3 樹と網

第一部の諸秩序は、それぞれの物に一つの場所を与えた。第3.3章の文書は一つのフォルダの中にあり、二つの場所に属するはずだったものは、二番目の場所には欠けていた。連関による秩序は、その必要がない。連関による秩序は、同じ物を多くのものと結びつけることができる。

今日ファイルを秩序づける者は、両方を利用でき、たいていは両方を用いている。フォルダ樹は階層的である。各ファイルは厳密に一つの場所に置かれ、それを探す者は上から道をたどる。キーワード付与はそうではない。同じファイルは任意の数のタグを持ち、それを探す者はそのうちの一つを介して検索する。樹は、事柄が一義的にどこか

に属しており、かつその道筋が分かっている場合に適している。タグは、事柄が複数の観点の下で関心を引かれ、後でどの観点からそれを探すことになるか分からない場合に適している。

図書館は、第二の形式のために独自の理論を発展させてきた。それがファセット分類である。ファセット分類は、対象を一度だけ位置づける代わりに、素材、手続き、場所、時間という複数の独立した軸に従って対象を記述し、あらゆるつながりを許容する。五つの標識をもつ樹ならば、五つの段階と固定された順序をもつことになる。ファセット秩序は五つの軸をもち、固定された順序をもたない。プログラミングにおいても、同じ対立が見られる。継承は樹である。クラスは上位クラスから継承し、上で妥当することは、その下のすべてに妥当する。継承は、物事が一つの秩序のうちにあるかぎりは機能し、一つの事柄が同時に複数の観点の下で規定されるとすぐに使いものにならなくなる。それへの応答が、互いに組み合わせることのできる部品である。或るものが何であるかを問う代わりに、それが何をできるかが規定され、その能力が結びつけられる。

このことによって、第3.3章の問いは解決されたわけではなく、ただ移されただけである。任意のタグ、並べ替え、フィルタは、誰かがそのためのフィールドを、データ一般について、そしてとりわけこれらのデータについて、あらかじめ設け、構築した場合にのみ存在する。差出人のためのフィールドをもたないアーカイブは、それ以外の点でどれほど融通がきいても、差出人によって絞り込むことはできない。どの観点が重要であるかは、その場合、文書をしまう時点ではなく、システムの構築時点で決定される。この決定は、あらゆる将来の事例のために一度だけ下され、それゆえ、各文書の前に新たに選択しなければならなかった記録係の決定よりも見落とされやすい。

同じ問いは、文書ではなく課題が秩序づけられるところでも生じる。国家は課題を省庁や官庁に配分し、企業は部門に配分する。それによって、それぞれの課題は厳密に一つの場所をもつ。事柄の連関は、その配分に沿わない。新しい道路は、交通、大気、健康、予算に関わり、それぞれの所管部門は、その道路について自分の管轄に属することだけを見る。部分を頂点でようやく統合する者、つまり内閣や部門長会議で統合する者は、所管部門の一つがすでに見たことしか見ない。部門の間にあるものは、どのフォルダにも入っていない。そのため行政組織は、管轄の樹の上に網をかぶせる。共同の作業部会、他の部署を関与させる義務、すべてに対して横断的に全体を見る部署などである。それがどれほどよく機能するかは、アーカイブの場合と同様に、構築の時点で、あらかじめ設けられたつながりにおいて決まる。

それゆえ、樹と網は、そのあいだで選択しなければならないような世界観ではない。両者は異なる強みをもつ秩序形式であり、選択は対象と目的に応じてなされる。法典を秩序づける者は、一義性を必要とし、樹を用いる。研究文献を検索可能にする者は、多様な検索を必要とし、タグを用いる。両方を必要とする者は、両方を用いる。たいていのシステムは、まさにそれを行っている。

9.4 関連が誤って読まれるとき

ある地区では、他の地区より多くの犯罪が記録されています。数字は正しい。たいてい、それは住民についての言明として読まれます。あそこでは人々がより犯罪的だというのです。この地区ではより多く取り締まりが行われ、それゆえより多く発見されるということは、この読み方では消えます。そして読み方は作用します。より多くの犯罪が疑われるところでは、より多く取り締まりが行われ、次の統計は前の統計を確認します。

反論：このことから、関連思考に対する反論が得られます。関連を確認する人は、確認するだけではありません。その人は、どの結びつきが引かれるかを選び、それがどう読まれるべきかを示唆します。こうして、連関の網は、個々の結びつきがそれぞれ正しいからこそ、物の秩序を自然なものとして現れさせることができます。

応答：反論は、まさに、連関の三つの種類の区別が作られた誤りを正確に記述しています。地区と記録された行為の数の間には、事実的連関があります。それを機能的連関として、住民の数への結果として読むことは、数字が供給しない証明を要求します。覆い隠されるのは、関連が考えられることによってではなく、ある種類の関連が別の種類として提示されることによってです。欠けているものは、誰かが飛ばされた線を引くとすぐに示されます。取り締まりから記録へ、そして記録から取り締まりへ戻る線です。

関連の網への批判は、それゆえそれ自体が関連思考であり、しかもより精確なものです。それは、結びつきがどの種類かを問い、欠けているものを引きます。

知と権力が互いに外面的ではなく、互いを生み出すことは、ミシェル・フーコーの著作の中核思想です。

9.5 すべてがすべてと連関しているとき

コーヒーメーカーを買いたい人は、決定を、プランテーションの労働条件、電力消費、カプセルのゴミ、台所の場所、客の好み、今後数年の家計計画と結びつけることができます。これらの結びつきのそれぞれは正当です。それらをすべて追う人は、コーヒーメーカーを買いません。

関連思考には独自の行き過ぎがあります。それは徹底的に見える行き過ぎです。多くの連関を見る人は、賢く責任ある人物に見え、しばしばそうです。しかし、網状化の背後には、決定への臆病が隠れていることがあります。考慮されていない結びつきがまだ一つある限り、決定しなくてよいのです。それに対して助けになる問いは、何かが何と連関しているかではなく、この場所でどの連関が支えるかです。これは再び第2章の観点であり、今は網に適用されています。

9.6 網がどこで挫折するか

網は、何かが何と連関しているかを示しますが、それを一瞬において示します。部門内の争いを、誰が関与しているか、誰が誰と同盟しているか、誰が誰に何を非難しているかを記述する人は、網を描いたことになります。おそらく完全な網ですらあります。それでも、それを聞く人は誰でも問います。それはどのように始まったのか、と。今日の網は昨年の網ではありません。今日のものだけを知る人は、諸々の立場を見ますが、それらがなぜそのように位置しているかは見ず、それらがかつては異なる位置にあったことも見ません。

この部の三つの秩序すべては、このことを共有しています。種類、部分、連関は、その対象を静止させます。それらは、その対象が何であるか、何から成り立っているか、何と連関しているかを問い、その間にその対象が変化しないことを前提としています。多くの対象では、これは害になりません。道具箱は、時間が何かを変えることなく、分類することができます。他の対象では、それがまさに誤りです。それに気づく人は、次の問いを立てます。何が動いているのか、そして何に従ってか、と。

さらに読む: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 章 15.8, 組織 (2026), 章 2

第10章 経過

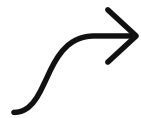

図 4: 過程の記号：先端に矢印のある曲がった軌道。まっすぐな矢印は、単に経過（Verlauf）が意味されているところで進歩を主張するため、曲がっている。

10.1 どう始まったのか

「どう始まったのか」 (DE: „Wie hat das angefangen?“)という問いは、争いの記述に欠けているものを探します。経過です。状態として記述されると、対立は位置の配列のように見えます。経過として記述されると、なぜ位置がそうあるかが示されます。

同じことが他の場所でも当てはまります。病人の訴えは一つの像を与えますが、しばしば診断は経過が初めて与えます。熱が突然来たかゆっくり上昇したか、三日ごとに回帰するかです。ひびの入った建物では、ひびの位置は、それらがどう成長したかよりも少なくを語ります。そして、争われている言葉が何を意味するかを知りたい人は、それがそう意味するようになった経緯を見ます。

経過による秩序は、短く経過（Verlauf）↑と呼ばれ、定着した外来語で過程（Prozess）と呼ばれるべきです。その問いはこうです。何が動いているのか、何に向かってか、です。

10.2 事柄が経過としてのみ捉えられる時

あらゆる対象がこの問いを要求するわけではありません。道具箱は、時間が何の違いも作らずに区分できます。アルファベットも同様で

す。決定する問いはこうです。時間が経つことによって、何かがそれであるものが変わるか。

ハンマーでは変わりません。ハンマーはすり減りますが、ハンマーであり続けます。人間では変わります。子どもは小さな大人ではなく、別のものです。一方に当てはまる記述は、他方を外します。施設でも同様です。創立の年のクラブと百年後の同じクラブは、メンバーが違うだけの同じものではありません。

答えが「はい」のところでは、対象を静止させる分節は、単に不完全なだけではありません。それは一つの状態を記述し、その状態を事柄として提示します。

10.3 何かに向かって運動するもの

何かが変化することはまだ秩序ではありません。すべてが変化します。経過による秩序は、何に向かってかが示されて初めて生じます。「最初はこう、次はこう、次はこう」 (DE: „Erst war es so, dann so, dann so“)は状態の列挙であって、分節ではありません。これは、種と部分がすでに満たさなければならなかったのと同じ要求です。その特徴を挙げない区分は区分ではなく、原理を挙げない経過も同様に違います。

原理は様々で、いくつかを区別できます。あるものは成長します。それは、種を変えることなく、それであるものがより多くなります。コレクション、資産のようにです。あるものは成熟します。それは、互いから生じ、入れ替えられない段階を通り抜けます。有機体（Organismus）、技能、理解のようにです。あるものは回帰します。運動は戻ってきますが、状態は全体として変化しません。季節、緊張と回復の交替のようにです。あるものは、転覆するまで高まります。変化は多かれ少なかれの変化であり、やがて敷居において種の変化になります。凍る水、エスカレートする争いのようにです。そして、あるものは崩壊します。それは、自らをまとめていたものを失い、部分が残ります。

経過を秩序づけたい人は、その原理を探し、しばしば、互いに交替する複数のものを見出します。争いは、転覆するまで高まり、その後、より穏やかな形で回帰し、いつか関係が崩壊するか、成熟します。分節は、そのとき、駅ではなく移行を名指すことにあります。

10.4 リズム

運動の一つの形式は、それが秩序づけそのものに関わるので、特別な注意に値します。長くある事柄について考える人は、二つの運動の交替に気づきます。一方では収集します。素材に開かれ、観点を取り入れ、見通しがきかなくなります。もう一方では秩序づけます。凝縮し、決定し、省きます。

両方の運動が必要であり、両方に誘惑があります。収集にとどまる人は結果に達しません。彼には常にもう一つの資料があります。早すぎる秩序づけは、素材に耐えない結果を持ちます。交替は事柄から来ます。秩序づけは素材を前提し、素材を収集することは、既存の秩序がもはやそれを把握しない限りでのみ引き合います。リズムは、両方を必要とし、両方を同時にはできない行いの運動形式です。

より大きなスケールでは同じことが、螺旋階段（Wendeltreppe）のように回帰します。理解は同じ問いへ戻ってきますが、一回り（Windung）高いのです。何年も前に明確に思えたことは、新しい側面を示します。以前の理解が偽だったからではなく、理解する人が、その間に多くを見たからです。これも一つの原理を持つ経過です。あらゆる回帰は、最後のときから加わったものを連れてきます。

10.5 種が段階であるとき

対象によっては、区別される種が同時に、互いを生み出す段階です。

文字は一つの例です。文字は、記号が何を代表するか、一つの物、一つの言葉、一つの音節、一つの音によって区分できます。これは種による区分です。それぞれの文字は、どの種に従うかをこの観点で見ることができます。それは同時に、大まかに言って、時間的な系列であり、しかも根拠のある系列です。言葉ごとに固有の記号を必要とする文字は、何千もの記号を必要とします。記号をその音に従って他の言葉のために使い始める人は、より少なくで済み、音を個々の音にまで分解する人は、数十で済みます。各々の種は、前の種の問題を解決します。

これを分ける人は、何かを失います。文字の種を時間的にのみ読む人は、根拠のない年代記を持ちます。一つのものが他のものに続いただけです。それを種としてのみ読む人は、根拠のない区分を持ちます。四つがあり、それらがこの順序で現れたのは偶然でしょう。一緒に読むと第三のものが生じます。種が段階であるのは、それぞれが、

前の種が挫折したものによって形成されているからです。そしてこれは、方法についての情報ではなく、対象についての情報です。種と段階が重なるところでは、人は、問題から発展する何かを扱っています。

10.6 同時に二つの秩序

二つの秩序の仕方が同時に当てはまることは、二つの異なる仕方でしばしば起こります。文字では一方が他方に食い込みます。種が段階であり、両方は一緒にしか理解できません。それに対して、ある都市の旅行ガイドはたいてい三つの部分を持ちます。都市の歴史、街区、種による見どころ、美術館、教会、公園です。これらは同じ対象への三つの問いです。一度は経過について、一度は部分について、一度は種についてです。そして、目次が一つの系列しか知らないので、それらは前後に並びます（第3.3章）。第一の場合、一方が他方に食い込み、第二の場合、一方が他方の隣にあります。両方を混同する人は、単なる隣接を内的な連関と見なすか、存在する連関を見落とします。

10.7 経過が挫折するもの

経過は、何かがどう生成（Werden）したかを示し、何に向かってかを挙げることができます。しかし、種と段階が重なるところでは、経過は、自分自身が説明できる以上のものを示します。なぜ各々の文字種がまさに前の種の問題によって形成されているかは、段階の系列は言いません。系列は、そうだったことを示すだけです。ここで立てられる問いは、経過を越えて届きます。肢節が唯一の根拠から生じるので、秩序そのものが、なぜまさにこれらの肢節であり、なぜこの順序であるかを言う秩序はあるのか、です。

第11章 自己展開



図 5: 自己展開の記号：逆さまの三角形が中に入った三角形で、その先端は辺の中点に当たる。同じ図形がその各部分の中で反復される。

11.1 数

学校で計算を学ぶときに使う数には種類があります。自然数、整数、有理数、実数です。それらは都市の名前のように暗記することもできます。しかし、なぜそれらが存在するのかを見ることもできます。

自然数、一、二、三によって、数えることと足し算ができます。しかも、どの足し算も完全に成立します。引き算は常に成立するとは限りません。三引く五は自然数ではありません。それが成立するためには、負の数が必要であり、それとともに整数が必要です。整数ではどの引き算も成立しますが、どの割り算も成立するとは限りません。七割る三は整数ではありません。それが成立するためには、分数、すなわち有理数が必要です。有理数ではどの割り算も成立しますが、どの根号を取ることも成立するとは限りません。それ自身を掛けて二になる有理数は存在しません。それが成立するためには、新しい数が必要です。実数はこの隙間だけでなく、数直線のすべての隙間を塞ぎます。そして、このゲームはさらに続きます。実数の中にも、二乗してマイナス一になる数はありません。

この秩序には、これまでのどの秩序にもなかったものがあります。この秩序は、なぜまさにこれらの種類なのかを述べています。それぞれの種類は、その前の種類のなかである計算が成立しないことから生じます。また、なぜそれらがこの順序で並ぶのかも述べています。前の種類なしに後の種類を作ることはできません。なぜなら、成立し

ない計算は、その前の種類において初めて姿を見せるからです。さらに、すべてに共通するものは何かも述べています。それらは、計算できる数であり、それぞれの種類は計算をより完全にする一つの仕方です。ここでは種類は同時に、互いの上に築かれる段階でもあります。文字の場合と同様です（第10.5節）。ただし、この順序は歴史の順序ではありません。二の平方根が分数でないことは、負の数よりずっと前から知られていたからです。これは構築の順序であり、その根拠は明らかです。つまり、計算が成立すべきであるという一つの要求です。

11.2 普遍、特殊、個別

数では、この種のあらゆる秩序で回帰する三つの側面を区別できます。すべての肢節で同じである普遍（Allgemeines）があります。うまくいくべき計算です。普遍が分かれる特殊（Besonderes）があります。数の種です。そして、全体が現実的になる個別（Einzelnes）があります。この数、二の平方根、三分の一、マイナス五です。特殊化（Besonderung）は普遍に外側から掛けられていません。それらは、普遍を特定の条件の下で考察するとすぐに、普遍から帰結します。ここでは、特定の計算がうまくいくべきであるという条件の下でです。

同じことを、数学から来ない事柄で示せます。民主制の普遍は、被治者が統治を規定することです。それがどう起こるかは条件に依存します。市民が広場に収まる自治体では、彼らは自ら討議し、票決できます。何百万の国ではそうできず、彼らは代表者を選びます。民主制の種、直接民主制と代議民主制は、偶然同じ名前を持つ任意の形式ではありません。それらは、異なる条件の下での普遍です。そして、民主制は常に個別としてのみ現実的になります。この自治体集会において、この議会において、これらの人々とともにです。

特殊が条件の下で普遍から生じ、個別において現実的になる秩序は、ここでは自己展開（Selbstentfaltung）↑と呼ばれるべきです。その秩序の中では、事柄が自分の肢節を自分から生み出すからです。これは再び、第6章で十分な根拠と呼ばれたものです。条件を伴う普遍です。新しいのは、この根拠がここでは、単一の出来事を説明するのではなく、分節された領域全体を説明することです。

普遍が自分の特殊化をこのように自分から生み出し、そのように分節された全体を、言語は二つの古い言葉で呼びます。日常ではより

弱く使われます。普遍は事柄の概念（Begriff）↑と呼ばれます。通常は、意味を持つ言葉をすでにそう呼びます。しかし、数の概念を持つ人は、言葉を知っているだけでなく、なぜ自然数、整数、有理数、実数があるかを見ます。その肢節が一つの根拠から理解できる全体は、体系（System）と呼ばれます。通常は、あらゆる固定した秩序、保管場所もそう呼びます。体系的に考えるとは、この本ではより多くを意味します。事柄を、なぜ自分の肢節がこれらであるかを言えるように秩序づけること、そして、それが言えないところでは、それも知ることです（第11.3章）。

▯▯ 5: ▯▯▯▯▯▯▯

豊かな概念、たとえば民主制を、三つの側面のうちの二つだけを使って説明してみてください。まず普遍と個別だけで、次に普遍と特殊だけで、最後に特殊と個別だけを使って。それぞれ何が欠けていますか。
三つの試みは異なって挫折します。普遍と個別だけ。「民主制とは、被治者が統治を規定することです。ここに五十の例があります。」 (DE: „Demokratie heißt, dass die Regierten die Regierung bestimmen; hier sind fünfzig Beispiele.“)例を分節するものが欠けています。なぜそれらがそんなに異なって見えるかは説明されないままです。普遍と特殊だけ。「民主制は直接と代議に分かれます。」 (DE: „Demokratie gliedert sich in unmittelbare und vertretende.“)事例が欠けています。概観があり、昨夜の集会がその下に入るかどうかわかりません。特殊と個別だけ。「議会、評議会、国民投票、市民集会があります…」 (DE: „Es gibt Parlamente, Räte, Volksabstimmungen, Bürgerversammlungen …“)それらを結びつけるものが欠けています。多くの形式があり、なぜそれらが同じ名前を担うかわかりません。

三つの側面は、すべてが三つの部分を持たなければならないという規則ではありません。種と部分の数を決めるのは事柄です（第8.2章）。数は三つより多くの種を持ち、民主制は二つの基本形式を持ちます。三つの側面は、同一の理解が、完全であるべきなら、事柄において存在しなければならない三つの仕方です。普遍、その特殊化、そして事例においてです。

11.3 それがどこまで支えるか

数は最も有利な事例です。その種は、普遍と、計算がうまくいくべきであるという要求から完全に導出でき、個々の数では、それがそれであるすべてが、その規定から帰結します。他の対象では、自己展開はより短くしか支えません。

生物では、多くを理解できます。飛ぶ動物は軽く造られていなければならないことは、飛ぶことから理解できます。草食動物が肉食動物より長い腸を持つことは、食物からです。しかし、なぜまさにこれらの蝶の種があり、他の種がないかは、どんな普遍からも理解できません。それには歴史があり、歴史は偶然に満ちています。第3.3章の記録保管では、自己展開は全く支えません。「母」フォルダと「税金」フォルダがあることは、保管の概念から帰結するのではなく、保管する人の生活から帰結します。

このことから、秩序づけの規則が帰結します。分節が普遍から生じるところでは、それが見えるように分節を叙述すべきです。分節が生じないところでは、秩序は外面的なままであり、必然性（Notwendigkeit）の外観を与える代わりに、それを知るべきです。たいていの対象はその中間にあります。大まかな特徴は理解でき、さらに枝分かれすると洞察は失われます。

11.4 普遍をどのように見いだすか

数においては、普遍は明らかにそこにあります。たいていの対象では、それを探さなければなりません。そして、その探求には学ぶことのできる形があります。人は試みに普遍を規定し、そこから特殊性が理解できるかどうかを吟味し、うまくいくまでその規定を修正します。

吟味されるのは二つの箇所です。一つは限界事例です。それはまだ含まれるのか。それはもはや含まれないのか。どこが不明瞭なのか。もう一つは広がりの幅です。限界の内側にはどのような異なる諸形態があり、その両極端は何か。天文学では長い間、太陽の周りを回り、球として見えるほど十分に大きな天体を惑星とみなしていました。海王星の彼方にますます多くの天体が見つかり、あるものはプルートとほとんど同じ大きさ、あるものはさらに重いことが分かると、それらすべてを惑星と呼ぶか、そうでなければ規定を変更しなければなりませんでした。天文学者たちは2006年に規定を変更しました。惑星は自

分の軌道を他の天体からきれいに掃除していなければならない、と。プルートはこれによって外れました。限界事例が普遍をより精確にしたのであり、新しい規定は、八つの惑星がなぜ一つの固有の種類を形成するのかを述べています。すなわち、それらは自分の軌道を支配しており、他のものたちは軌道を多くの天体と共有しているからです。

限界事例に出会うのは、科学だけではありません。誰でも、ある語の使用にためらいを覚えるところで、それに出会います。誰かがある採決を民主的と呼び、自分の内で何かが立ち止まります。投票は全員に許されていたが、全員が何について投票するのかを知っていたか。誰もが自分の考えを言うことができたか。結果は投票にかかっていたか、それとも前もって別の場所で決まっていたか。このためらいのなかで、語は一つの問いへと変わっており、その問いによって、被治者が政府を規定するという第11.2節の規定が吟味されます。それは間違ってはいませんでしたが、粗すぎました。なぜなら、規定するということは投票すること以上を意味するからです。それは、自分が何について決定するのかを知っていること、自分の考えを表明できること、そして決定が実際に投票する人々の手にあることを前提します。したがって、ためらいは明晰さの欠如ではありません。それは概念がより精確になる箇所であり、それを素通りする者は、語を保持し、概念を以前のままにしておきます。自分自身がためらわない場合でも、他の人がしばしばためらいます。なぜなら、その人は別の事例を知っているからです。ある種の限界事例は、対話のなかで初めて見つかります。より精確な規定は、粗い規定よりも根拠づけが優れています。なぜなら、その規定は、粗い規定が行き詰まった点に答えを与えるからです。それが唯一可能な規定であるわけではありません。他の事例から出発する人は、被治者が政府を規定するとはどういうことかを、おそらく別の仕方でより精確に捉えるでしょう。たとえば、暴力なしに政府を再び解任できる、というように。

二つの吟味は互いを精緻化します。新しい限界事例は、普遍をより精確に把握することを強います。そして、より精確に把握された普遍は、諸形態を新たに秩序づけます。探求は、限界と広がりの両方を理解できる一つの規定が見つかったときに終わります。ただし、それは暫定的に終わるのであって、次の限界事例がそれを再び開くことがあります。

11.5 対象を変化させる概念

誰が失業者と見なされるかは、定義が決めます。職業訓練にいる者は数えるか。週に二時間働く者は。探すことを諦めた者は。答えに応じて、数は増減します。一人の人間の状況は何も変わらないのにです。しかし、定義は作用し返します。もはや数えられない者は、他の給付と他の役所からの手紙を受け取り、ひょっとするとすぐに自分を別様に見るようになります。

反論：概念は、そこにあるものを単に記述するのではありません。概念は、何が何として数えられるかを確定し、人間の場合は、自分が確定するものを変化させます。診断、統計のカテゴリー（Kategorie）、集団の呼称は、その中に自分を再認し、それに従って扱われる人間を生み出します。それなら、概念形成は、認識として提示される権力の一形態ではないでしょうか。

応答：所見は正しく、人間の場合、それは物の場合より重くあります。石は、別様に位置づけても変わりません。人間は、状況によっては変わります。ただ、概念はそれゆえ自分の対象を任意に形作るのではありません。概念が捉える人間は、概念に応答します。彼らは、概念が自分に当てはまることを争い、その網の目から落ち、概念が予見したのと別様になります。自分の対象を共に刻印する概念は、石についての概念以上の抵抗に遭います。語ることができる者に遭うのです。

このことから帰結するのは義務であって、免責ではありません。概念が作用し返すところでは、概念はより頻繁に吟味されなければならず、関係者は、概念が自分を吟味させなければならない人々に属します。彼らは第11.4章の境界事例であり、反駁しうる者たちです。

概念と知の秩序が、それらが記述するように見えるものを生み出すことを、ミシェル・フーコーは狂気、病、刑罰について研究しました。カテゴリーが、それが捉える人間にどう作用し返すかは、イアン・ハッキングがより精確に記述しました。

11.6 自己展開と他の四つ

自己展開は他の秩序の仕方の隣にあるのではなく、それらを自分の中に取り込みます。普遍は外へ向かって種に分かれます。数の種、民主制の形式です。それは内へ向かって部分に分かれます。代議制民主制には選挙、議会、それに責任を負う政府が属します。これらの部分

のそれぞれは、普遍から帰結する課題を持ちます。肢節の間には連関が、しかも概念的連関が存在します。議会は、有権者と政府との関係（Verhältnis）においてのみ、それであるものです。そして、特殊化が互いから生じるところでは、数のように、それぞれの種が前の種によって形成されるところでは、種は同時に段階です。歴史においてであれ、構築においてだけであれ。

他の四つの秩序の仕方は、それぞれ事柄への一つの問いを問います。自己展開は、なぜこれら四つの問いへの答えが、それらがそうであるように出るかを問います。それゆえ、自己展開は終わりにあります。自己展開は、四つの隣の第五の仕方ではなく、四つが、それらが根拠を持つところで自分の根拠を持つ秩序です。

この取り込みには、三つのことを同時に言う言葉があります。四つが自己展開の中で自分の根拠を持つところでは、それらはその中で止揚（aufheben）されています。そのとき、それらはもはや単独では妥当しません。その根拠はこの秩序の中にあるからです。それらはその中で保持されます。数の種は相変わらず種であり、民主制の部分は部分です。そして、それらはその中でより高く立ちます。今や、なぜそれらがそう出るかが見えるからです。この三つの意味、終わらせる、保持する、高める、での止揚は、思考の基本的運動です。真理(2025)は、矛盾が解決するところでそれを示します。ここでは、一つの秩序が他の秩序を自分の中にどのように取り込むかによって示されます。

さらに読む: 真理, 章 7

第12章：どちらの秩序がよりよいか？

12.1 適切な問い

見通しのきかない状況の前では、人は五つの問いをすべて順番に立てるのではありません。欠けている問いを立てます。そして、欠けているものは、たいてい名指せる前に示されます。何を扱っているかわからない人は、種を問います。これはどんな事例か、似た事例を知っているか、と。一度に多すぎる人は分解します。これは何の部分から成るか、どの部分が困難を作るか、と。何かが宙に浮いているように見える人は、連関を問います。これは何と連関しているか、誰がさらに影響を受けるか、と。記述が正しく見えるが捉えない人は、経過を問います。これはどう生じたか、いつからそうなのか、と。秩序が滑らかにうまくいくが任意に見える人は、根拠を問います。なぜまさにこれらの肢節か、と。

秩序は、すべての問いを立てることによってではなく、正しい問いを立てることによって生じます。ときには一つで十分です。ある経過がどのファイルに属するか知りたい人は、経過の歴史を必要としません。ときには複数が必要で、そのときそれらは互いに食い込みます。対象をどう区分するかが、何がその部分として現れるかを変え、どう分解するかが、どの連関が見えるようになるかを変えます。

12.2 三つの段階

同じ対象の二つの秩序が可能なとき、どちらを優先すべきでしょうか。答えは三つの段階を持ち、あらゆる秩序の仕方に当てはまります。

第一は把握です。秩序は、対象からより多くを収めるときより良いものです。多くの事例がその下に入り、残余が残らない少数の種、全体がそこから理解できる少数の部分です。これは第1.3章の凝縮です。

第二は、大切なものの保持です。把握だけでは十分ではありません。さもなければ、最も強い凝縮が最良でしょう。そして、第1.3章は、それが最良でないことを示しました。すべてを、大切な差異を平らにすることで収める秩序は、多くを把握しましたが、何も説明していません。何が大切かは、まず問いが決め（第1.4章、第2.2章）、次に、根拠が見出されるところでは事柄が決めます（第6.5章）。

第三は、自分自身の原理の共説明です。良い秩序は、どの肢節があるかを言うだけでなく、なぜこれらなのかを認識させます。それを成し遂げるのが自己展開です。度合いに応じてです（第11.3章）。それがうまくいかないところでは、秩序は外面的なままであり、それを覆い隠すより言う方が良いのです。

自分の原理をまだ知らない秩序も、外面的以上のものでありえます。ドミトリ・メンデレーエフが1869年に既知の元素を原子量に従って並べ、似た性質の元素が同じ列に来るように上下に配置したとき、隙間が残りました。彼はそれを開けたままにし、そこに元素が欠けていると予告し、それがどんな重さと性質を持つべきかを挙げました。その後の十七年間に、そのうちの三つ、ガリウム、スカンジウム、ゲルマニウムが見つかり、それらは適合しました。なぜ周期表がまさにそのように構築されているかは、メンデレーエフは知りませんでした。それを示したのは原子の構造だけです。しかし、彼の秩序は、どこに何かが欠けているかを示し、それによって、便利な配列以上のものであることが実証されました。

悪い秩序は、それが増殖することによって認識されます。新しい事例のそれぞれに新しいカテゴリー、逸脱のそれぞれに例外、反例のそれぞれに特別事例を必要とします。そのとき、それはすべてを把握し、何も説明しません。それはどの事例によっても挫折しえません。あらゆる事例のために場所を作るからです。それに対して、自分の原理を共説明する秩序は、形成の際に与えられていなかった事例に適用でき、事例が合わないときそれを示します。まさにこの場所で、人は秩序から学びます。

肢節の数をどう評価するかは、ここから帰結します。それが決定的であることはまれです。秩序が種や部分を区別するところでは、事柄が数を決めます。それがどんなに大きかろうとです。別なのは、秩序が、規定がどう精確になるかをなぞるときです。そこでは三つの肢節が生じます。事柄と大まかに一致する第一の把握、両者が、完全に分離することなく離れる境界事例、そして再び一致し、今度は境界事例が示したことを展開する、より精確な把握です。第11.4章での惑星の規定は、海王星の向こうの天体を経て、より精確な規定へ進みました。螺旋階段で一回り高い、第10.4章のようにです。この三つの肢節

は、規定がより精確になる思考のあらゆる運動が持ち、あらゆる分節が持つわけではありません。事柄における経過は、それらに従うことなく、成長し、転覆し、崩壊しえます（第10.3章）。そして、三つのそれぞれをさらに分節できます。そのとき数は増えますが、運動は変わりません。数を争う人は、それゆえたいてい誤った問いを争っています。吟味すべきは、三つか四つかではなく、各肢節が何かを支えるか、合わせて何も欠けないかです。

12.3 相互参照

どんな秩序も、あらゆる物を、それが属するあらゆる場所に収めることはできず、どんな叙述もすべてを同時に示すことはできません（第3.3章）。第二の場所で欠けているものは、そこへの相互参照によって取り寄せることができます。しかし、相互参照はすべて同じ種類ではなく、それを作る人は、自分のものがどの種類かを知っておくべきです。

秩序の二つの場所は、二通りの仕方で連関しえます。秩序における位置によって、またはそれらが扱う事柄によってです。位置によって連関するのは、それらが分節において同じ位置を占める場合です。たとえば、三区分のそれぞれの第一の肢節、または秩序が挫折する段階です。これは形式の、内容の親縁性ではなく、位置そのものが何かを語るところでのみ、つまり自分の根拠を示す秩序においてのみ、何かを語ります。アルファベットでは、二つの言葉がページの同じ位置にあることは何も語りません。

事柄によって二つの場所が連関するのは、三通りの仕方です。同じ事柄が、秩序がそれを二つの観点で通るので、二つの場所に現れることがあります。書簡が「税金」の下と「母」の下にある場合です。同じ事柄が異なる発展（Entwicklung）にあることがあり、一方の場所が、他方が展開することを先取りするか、後の場所が、前の場所が始めたことを取り上げます。そして、二つの場所が同じ事柄を異なって規定し、互いに矛盾することがあります。この最後の相互参照は最もまれで、最も示唆的です。そこに、秩序がまだ自分と一致していない場所が示されるからです。

より多くの仕方はここでは見えません。場所は形式によって、または内容によって連関します。内容によってなら、それは同じものであるか、別の発展における同じものであるか、矛盾するものです。この

区分が完全かどうかは、これら四つのどれにも合わない相互参照によって示されなければなりません。

相互参照は取り出しを改善します（第1.2章）。場所から場所への道を短くします。しかし、相互参照は費用もかかります。というのも、相互参照は作成され維持されなければならず、もはや存在しない場所への相互参照は、ないよりも悪いからです。

秩序を全く相互参照から構築することもできます。相互参照だけで結ばれたページ、目次も系列もないページです。何を探すか知っている人は、すぐにそこにいます。知らない人は、一つの相互参照から別の相互参照へ従い、終わりには、自分が何を見たかも、他に何があるかも知りません。相互参照は取り出しを与えます。概観を与えるのは、それらが枝分かれする系列または樹木です。

12.4 研究における、そして書くときの秩序づけ

生物学では、体系性（Systematik）がどんな種があるかを問い、解剖学が生物が何から成るかを問い、生理学と生態学が、その部分とそれ自体が何と連関するかを問い、発生生物学と進化論が、それがどう成ったかを問います。そして進化論は、それが支えるところで、なぜまさにこれらの種がまさにこれらの部分を持つかの根拠を挙げます。進化論は、生物学が自分の区分を共説明する場所であり、その限界は、第11.3章が見出した場所、歴史の偶然にあります。五つの問いは、それゆえ対象だけでなく、学問全体を分節します。

研究する人は、それによって、自分が今どの問いを立てているかを吟味できます。学問における論争の多くは、第2.2章が記述したように、二つの問いの間の論争です。種がどこに属するかを問う分類学者と、その種が生息環境で何をするかを問う生態学者は、同じ種について、どちらかが誤ることなく、異なる意見でありえます。

書く人は、同じ選択の前に立ち、それを一つの系列で下さなければなりません。教科書は、種、部分、連関、歴史、または一つの基本思考から分節でき、しばしば複数を前後に、または互いに入れ子にして必要とします（第10.6章）。良い分節とは、その順序を根拠づけられるものです。読者に各場所で、次に必要なものを与え、終わりに、なぜそのように構築されていたかを言える分節です。この本は、回顧においてそれを試みます。

12.5 第III部の回顧

なぜまさにこれら五つの秩序の仕方であり、なぜこの順序なのでしょうか。

それぞれは、前のものが挫折したところから始めました。種は並んで存在し、個々の物がどう構築されているかを言いません。部分はそれを言いますが、部分はその外部とともでのみ部分です。連関はこの外部を示しますが、一瞬においてです。経過は時間を示し、種と段階が重なるところでは、根拠から発展する何かを示しますが、この根拠そのものは名指しません。自己展開がそれを名指します。順序は、第Ⅰ部が終わった場所、分類するところ、今度は事柄から帰結する特徴に従って、始まります。順序は、なぜ自分の肢節がこれらであるかを示す秩序で終わります。

反論：同様に連関から始めることもできます。すべては、それであるものとしてのみ、他のものとの関連（Beziehung）においてです。種と部分は網の中の結び目です。網が第一のものです。

応答：網には結び目があり、結び目は、何かがそれらの間に張るために、何かでなければなりません。連関を初めに置く人は、自分が結びつける肢節を、種または部分としてすでに持っていなければなりません。正しいのは、肢節は自分の連関の中で初めて完全に理解されるということです。順序自体がそれを示します。部分は、まさに、自分の外部とともでのみそれであるものであることに挫折しました。しかし、何かが自分の連関の中で初めて完全に理解されることは、連関の前には何もないことを意味しません。

第二の反論：さらに秩序の仕方があります。場所によって、地図のように秩序づけることができ、順位によって、大きさ、価格、価値の表のように秩序づけることができます。

応答：地図は空間の部分とその近隣を秩序づけます。地図は、場所という特徴を持つ部分と連関による秩序です。順位づけは、度を持つ特徴による区分であり、種に、より精確には第7.3章が物の代わりに度について述べたことに属します。あらゆる秩序が五つに還元できるかは、これによって証明されていません。五つは、この歩みで生じ、これまで実証されてきたものです。それらのどれにも還元できない第六のものを見出す人は、この分節を変える所見を持っています。

第4部 秩序が私たちに課すもの

第13章 凝縮と喪失

13.1 凝縮の三つの段階

第1.3章は秩序づけることを凝縮することと呼び、その際何が失われるかという問いを未決にしました。その間に、凝縮の三つの段階を区別できます。この本は三つすべてを通りました。

第一は、観察をパターンに凝縮します。隣人の十四の帰宅時刻の代わりに一つの規則を覚えます（第4.1章）。第二は、パターンを原理と根拠に凝縮します。シャワー、暖房、市場の振動の代わりに、遅れを伴う制御ループを理解します（第5.1章）。第三は、領域全体を、各肢節がその場所を持つ分節に凝縮し、最も有利な場合には、なぜまさにこれらの肢節なのかを言う分節にします（第11章）。

各段階で、前の段階が持たなかったものを得ます。パターンは何が回帰するかを言い、原理は何が反復するか、なぜか、それゆえどこで終わるかを言い、分節は全体がどう構築されているかを言います。そして、各段階で同じ仕方で誤りえます。粗すぎる凝縮をして大切なものを失うか、細かすぎて何も得ないかです。第1.3章の偏見は第一段階の誤り、すべてを説明する効用最大化は第二段階の誤り（第5.3章）、増殖する分節は第三段階の誤りです（第12.2章）。

13.2 なぜ凝縮が成功するのか

細部に満ちた世界が、少数の規則が多くの事例を代表するほど凝縮できることは、自明ではありません。一つの答えが近くにあります。世界は秩序づけられており、凝縮する思考は世界の秩序に応答する、というものです。

この答えは、必要とされるよりも強く、この強さでは吟味できません。それを主張する人は、自分の凝縮が世界に合うと言えるために、あらゆる凝縮なしの世界を知っていなければなりません。それは誰にもできません。世界を見る視線もすでに凝縮するからです。

吟味できるものは、より控えめで、十分です。良い凝縮は実証されます。凝縮は、予告し、計画し、行為することを、自分が形成されたのではない事例でも可能にし、それが期待させるものが起こります。悪い凝縮は挫折します。間違ったものを期待させ、それに基づく計画が失敗します。このことに気づくために、世界を凝縮なしに知る必要はありません。うまくいかないものによって気づきます。二週間後に整理し直される洋服箪笥のようにです（第2.1章）。世界が全体として秩序づけられているかは、これでは決まりません。ある凝縮は実証され、他は実証されないこと、そしてその違いに気づけることで十分です。

13.3 残余

どの凝縮も何かを取りこぼします。そして、そのうちのあるものは、より良い凝縮によっても取り戻すことができません。

長く友人を知っている人は、友人がどのように反応するかを知っています。その人は友人のパターンを学び、友人の気分の根拠を知っており、赤の他人に数文で友人を描写することができます。ところがその後、友人は、これらの描写のどれにも当てはまらないことをします。それは描写が間違っていたからではなく、友人が、自分から凝縮できるもの以上のものだからです。一人の人間は、自分のパターンの単なる一事例ではありません。その人をそのように扱う者は、それを身をもって感じさせられます。そして、しばしば当然のことです。

□□6□□□□□□□□□□□□□□□□□

この文を読んでいるあいだ、読むこと自体を観察してみてください。目の動き、意味の生起、文がどのように続くかについての予期を。
おそらく、読むことが滞るでしょう。人は読むことができるか、あるいは読むことを観察することができます。両方を同時にうまく行うことはできません。観察できるのは、読むことの特徴、つまり動き、休止、後戻りです。読むこと自体、つまり文が理解される遂行は、それらのうちにはありません。

秩序は一つの遂行を記述することはできますが、それを遂行することはありません。秩序は、読むことがどのように機能するかを述

べることはできますが、読むことはしません。また、秩序は、或る新しいものが生じる条件を示すことができます。しかし、新しいもの自体は、まさにそれらの条件から予測できなかったものです（第5.3節）。これらの箇所、すなわち個別的なもの、遂行、新しいものにおいて、残余が残ります。どの秩序もそれに追いつくことはありません。

反論: それならば、秩序づけることは自己欺瞞です。自分の秩序が最も重要なものを省いていると知る者は、何かを理解しているかのように振る舞うのをやめるべきです。

応答: この反論は、秩序が決して約束しなかったことを秩序に要求しています。土地を代替しようとする地図は、土地と同じ大きさでなければならないでしょう。何も省かない秩序は、秩序ではありません。秩序づけることをやめる人は、個別的なものをより多く持つのではなく、より少なく持つことになります。個別的なものが個別的なものとして姿を見せることができるような予期をもはや持たないからです。友人が何か驚くべきことをするのは、予期を持っていた人だけが気づきます。予期に従わないものは、第2.1節で洋服箪笥を整理し直したときの、同じ抵抗です。

第二の反論、逆の方向から: 残余は、まだ理解されていないことの残余にすぎません。十分なデータと十分な忍耐があれば、友人も予測できます。今日驚くものは、明日には説明されるでしょう。

応答: 今日驚くもののうちのあるものは、明日には説明されます。それがすべての学びの歩みです。しかし、あらゆる驚きをあらかじめ、単にまだ説明されていないものだと説明する人は、自分の秩序をあらゆる反駁から守ってしまっています。その秩序はもはや何によっても失敗しえず、それによって、すべてを説明する原理（第5.3節）と同じく、何かを語ることをやめてしまっています。二つの反論の間には、この本が始元から歩んできた道があります。秩序づけ、秩序が成立しない箇所に気づくことです。

ここから、第3.3節が記録保管所において見いだしたのと同じ条件が帰結します。秩序は残余を見えるように保たなければなりません。秩序はすべてを把握する必要はありませんが、把握しているかのように振る舞ってはなりません。

読書案内：真理 (2025), 章 10

第14章 死んだ秩序

14.1 書式47B

ある人が自分の通りの駐車許可証を申請したいと思います。彼は書式に記入し、窓口で、それが前年の版であることを知らされます。データは転記できず、すべて書き直さなければなりません。身分証明書のコピーには認証が必要で、それは今日閉まった別の窓口にあります。個々のステップのそれぞれには根拠があります。全体は、それが設置された目的を妨げます。

このような秩序は悪意から生まれたのではなく、たいてい愚かさからも生まれていません。理解できる根拠があります。多くの人々が共同で働くところでは、すべてを対話で処理できず、規則が書かれます。最初は頻繁な事例のために、次にまれな事例のために、次に例外の例外のためにです。思惑で決定されるところでは、しばしば好意が決定し、それゆえ、誰もが確認できる基準が定められます。測定されるのは、そのとき測定できるものであり、測定しにくいものは外れます。そして、規定が妥当するところでは、誰も決定する必要がありません。「規定にそう書いてある」 (DE: „Das steht so in der Vorschrift“)は、それを言う人を免責します。これらの動きのそれぞれには正当性があります。一緒になって、それらは自分の目的を忘れた秩序を生み出します。

14.2 死んだ秩序をどこで見分けるか

ここでは、ある秩序が 機械的 であるとは、その部分が相互に関係なく、また何のためかという問いなしに作動することを言うことにします。たとえば、もはや何も投入されなくても動き続ける機械のように。その反対は 生きた と呼ばれることにします。この言葉はここで正当化されなければなりません。なぜなら、それは気分のように響くからです。意図されているのは、検証可能な性質です。生きた秩序においては、各部分は互いを規定し合い、全体において初めてそのもの

であるのです。たとえば、ハンドルは自転車においてのみ操舵するものです（第8.1章）。そして全体は、自分が挫折するところに応じて自らを変えることによって、自らを維持します。人間が担う秩序においては、この両方が観察できます。その秩序の中で全体において初めてそのものであるものは、役割であって、それを果たす人間ではありません。第8.5章の従業員は、自分の家族やサークルにも属しています。

機械的秩序は、これまで述べてきたことから生じる兆候によって見分けられます。その区画に合わないものは、合うように作り変えられるか、無視されます。「その他」の区画は欠けているか、溢れかえっています（第3.2章）。手続きは目的よりも重要です。「私たちはお役に立てませんでしたが、すべて正しく処理されました。」 (DE: „Wir konnten Ihnen nicht helfen, aber es wurde alles korrekt bearbeitet.“)難しい事例は、欠落を示す指摘ではなく、妨害と見なされます。そしてその秩序は、自分の誤りから学びません。なぜなら、誤りを認めることが許されないからです。欠落を指摘する人は、システムを攻撃する者と見なされます。

生きた秩序は、その対となるものを示します。それが合わないもののための場所を持ち、それが蓄積していないかどうかを確認します。そこで働く人は、ある規則が何のためにあるかを言うことができ、それゆえに、その規則が機能しない時も言うことができます。難しい事例は、その秩序がどこで粗すぎるかを示すので、収集されます。そしてその秩序は、あらゆる反論に対してではなく、繰り返し挫折する箇所において変化します。

その尺度は、秩序がどれだけ多くの規則を持っているかではありません。正確で厳格な規定が生きた秩序である領域があります。航空機の整備、医薬品の製造、試験の規則、裁判所の手続きなどです。そこでは、厳格さが不運や恣意から守り、そこで働く人は、それが何のためにあるかを知っています。秩序が死んだものになるのは、その規則によってではなく、もはや誰も、それらが何のために通用しているのかを知らないことによってです。

同様に、その秩序における機械的なものすべてが欠陥であるわけでもありません。生きた秩序もまた、誰かが毎回何のためかを問うことなく作動する部分を含みます。身体が骨と代謝を含むように、書類整理システム、会計、休暇中の代理などです。それらは、そこで働く人々を、判断を要することのために解放します。本章の意味で機械的になるのは、そのような部分が全体から切り離され、誰かが挙げることのできるいかなる目的にももはや役立たないところで動き続けるときだけです。

14.3 整合的欺瞞

前節の区別には危険な隙間があります。生きたもののほとんどすべての徴候を示しながら、それでも迷わせる秩序があります。それらは動きやすく、難しい事例に応じ、学習意欲があるように働き、多くを説明し、そして偽です。

ある人は、宇宙からの訪問者が初期の高度文化を創建したと確信しています。彼は素材を集め、それはますます多くなります。その時代の手段には重すぎるように思える石を持つ建造物、丸い頭の人物の岩絵、空から来た神々の伝説です。それぞれの断片は説を支えるように見え、たいていは実際に存在します。彼に欠けているのは素材ではありません。欠けているのは、素材が、説の光で秩序づけずに見たときに何を示すかという問いです。機械なしで重い石をどう動かせるか、岩絵の丸い頭が他に何を表しうるか、仮面や頭飾りをです。説は、素材を貫通する代わりに、素材を秩序づけます。合う断片はそれぞれ確認と数えられ、合わない断片は無視されます。第4.2章は、作られたパターンがどんなものかを記述しました。どんな物音にも聞き込めるものです。ここで起こっているのはまさにそれです。そして、ほとんどどんな説にも多くの素材が見つけられるので、証拠の量は基準として役立ちません。

いくつかの断片は、説なしにも説明されないままです。ナスカの砂漠の大きな地上絵は、全体としては上から最もよく見渡せます。小さな下絵から、杭と縄で、そのような図形を地面に縮尺通りに移せることが再現されました。これによって、その時代の手段で可能だったことが示され、これは宇宙からの訪問者より単純な説明です。それがそう起こったことは、これによって証明されていません。過去について私たちが知ることは再構成されたものです。私たちが持つ最良の説明であり、それ以上ではありません。図形が何のためにあったかは、いずれにせよ未決です。複数の根拠のある推測がありますが、決定はありません。まさにそのとき、現象を保存するのが正しいのです。それがまだ説明できず、残りと統合できないときでもです。それは、さらに取り組める未決の問いのままです。悪い説明はそれを早すぎに閉じます。それは、根拠づけられていない確実性を与え、問いから、さらに立てられるための動機を奪います。開かれたままの謎は、偽の答えより誠実です。

このような秩序は、さらにその凝縮によって自らを露呈します。良い説明は凝縮します。一つの原理が多くの事例を説明し、何が起こるかを予告する中で実証されます（第5.2章）。整合的欺瞞（kohärente Täuschung）は悪く凝縮し、良い凝縮として提示します。新

しい事実のそれぞれに、新しい補助仮定（Zusatzannahme）を必要とします。断片が別様に説明されると、次の断片がその場所に入り、または別の説明が説の一部になります。仮定の負担は増し、予告力は空のままです。後からは常にすべてが合い、前もっては、そこから挫折しうるものは何も帰結しません。それは増殖する秩序（第12.2章）であり、自分の増殖を深さとして提示します。

この形式は、すべてを操る秘密の集団の物語で最もよく知られています。それは、起こることを苦もなく説明し、あらゆる反論を、それによって砕ける代わりに取り込みます。それに反駁する人は、内部の者か、欺かれているのであり、欠けている証明は、痕跡がどれほど良く消されているかを示すだけです。誤りは、説明の形式にあり、その対象にではありません。密約は存在します。同業の人々は価格を取り決め、ネットワークは地位を分配し、官庁は、公衆が知るべきでない計画を遂行します。長く妄想と見なされていたものの多くは、調査と公開された文書によって裏付けられました。隠れた行動についての主張は、それゆえまだ整合的欺瞞ではありません。それは他の主張と同様に吟味できます。誰が何をいつ行ったはずか、それがどんな痕跡を残したはずか、何が主張を反駁するか、です。このような主張は挫折しえ、確認されえます。

不信が正当であるところでも、それに続く説明の形式が決めます。「誰が利益を得るか」という問いは事実的連関を確認します。誰かが出来事から利益を得た、と。そこから、彼がそれを引き起こしたか計画したと推論することは、事実的連関を機能的連関として読むことです（第9.2章）。そのためには固有の証明が必要です。しばしば、別の説明がより良く凝縮します。人間が行為する状況から説明する人は、多くの事例を一度に説明します。誰も何も計画していない事例、異なる場所の異なる人々が互いを知らずに同じことをする事例もです。計画から事例へ説明する人は、新しい事例のそれぞれに新しい計画を必要とします。これは、計画が存在することを争いません。ただ、状況がすでに説明する場所では、計画は補助仮定だと言うだけです。状況を見出せるのに加害者を探す不信は、しばしば正当ですが、誤った方向を向いています。不信は、加害者が名指しされたとき物事を片付いたと見なし、新しい加害者を生み出す状況は手つかずのままです。

同じ理由で、「陰謀論」という言葉は吟味として役立ちません。言葉は主張を、それが何についてか、公式の叙述と矛盾するかによって、つまりその状況によって秩序づけ、その構造によってではありません。これは第7.1章がクジラで示した誤りです。ラベルの下には、そのとき世界陰謀の閉じた物語と、隠れた計画についての裏付けのある調査が等しく入ります。しばしばラベルは不平等に与えられます。

敵対的な勢力について暴くものは啓蒙と呼ばれ、同じ手続きが自分の側に適用されると陰謀論と呼ばれます。ラベルは、それ自体が向かう形式を取ることさえあります。公式の叙述へのあらゆる反論が、反論であるというだけで陰謀思考の徴候と見なされるなら、そのときこの叙述はもはや何によっても挫折できません。これと類縁的なのは、発信者から事柄への推論です。信頼できない人々も主張しているからという理由で主張を退ける人は、主張を吟味していません。逆に、主張は、自分を抑圧された真理として提示することによって信頼に値するようにはなりません。両方向で助けになるのは、ラベル付けする代わりに吟味することだけです。

証拠の重みには、そのとき一つの規則があります。主張が、よく吟味された知から遠く離れるほど、より多くを示さなければなりません。これは主張への判定ではなく、負担の分配です。よく吟味された知も、誤りうる共有された秩序です（第14.4章）。規則はただ、知が証拠によって動かされることを要求し、整合性によってではないことを要求します。

それゆえ、試しは内的整合性ではありません。整合的欺瞞はそれを溢れるほど持っているからです。試しは三つのことを問います。説明は素材を貫通するか、それとも、前もって確定していた解釈に従って素材を分類するか。説明の凝縮は予告と適用で実証されるか、つまり、各事例のために新しい仮定を必要とする代わりに、事例のクラス全体を一つの根拠から説明するか。そして、それを放棄するためには何が起こらなければならないか。最後の問いに答えを持たない秩序は、生きておらず、不死です。説明では、不死は品質の印ではありません。同じ三つの問いが、公式の叙述にもその反対者にも向けられます。

このことから、なぜ内的整合性だけでは支えないかも示されます。整合性は必要です。矛盾した説明は説明ではないからです。しかし、十分ではありません。最も閉じた妄想の建物も内的に整合的です。秩序が生きているかは、秩序に抵抗できるものによって測定され、秩序そのものによってではありません。

14.4 共有された秩序

これまでは、誰もが自分のために秩序づけているかのように響きました。しかし、人が扱うほとんどすべての秩序は、受け継がれたか、共有されたものです。それは言語から始まります。あらゆる言葉は完成

された凝縮です。「契約」という言葉を学ぶ人は、何世代もが取り組んできた秩序を、それを繰り返す必要なしに引き継ぎます。自らの思考は、個々の細部から始まるのではなく、他の人々が形成した秩序の蓄積のまっただ中で始まるのです。

諸科学は、このことから一つの手続きを作り出しました。誰もすべてを自分で吟味することはありません。仕事は分割されており、個々の吟味者の代わりに、吟味の構造体が現れます。計算を確認する同僚、繰り返される実験、何十年にもわたって育まれ、洗練され、時には放棄される概念。一つの公式、一つの理論、よく規定された専門概念は、共同で吟味された凝縮です。小規模な場合でも同じことが当てはまります。慣れた作業グループは、外部の者には空虚で、関係者には全経験を担う概念を持っています。

これには裏面があります。誤った凝縮も共同で保持され得ます。流行、学派、陣営は、事柄においてとっくに挫折している秩序を生かし続けます。その共同体はそのときもはや吟味せず、確認するだけです。それゆえ、共有された秩序は、自分自身の秩序と同じ吟味を必要とし、さらに一つの吟味を必要とします。ここで誰が私のために凝縮したのか、そしてその人が悪く凝縮したことを私は何によって気づくのか、と。そのような共同体において最初に失われるのは、秩序の正しさではなく、その誤りに気づく可能性です。

さらに読む: 真理 (2025), 章 11, 17, 18 and 19, 組織 (2026), 章 12

第15章 自分自身の秩序

15.1 自分自身を秩序づける思考

□□ 7: □□□□□□□□□□□□□□

一瞬立ち止まり、この本を読んでいるときに何が起こるか、そして何によってあなたがそれに気づくかに気づいてください。
人は二重化に突き当たります。人は秩序づけについて考え、その際に秩序づけています。人は秩序を、それ自体が秩序である基準で吟味します。そして、この二重化に気づくこともまた秩序づけです。

反論：そこには循環があり、無害なものではありません。この本は秩序の基準を展開し、それを自分自身に適用します。これは、巻尺が自分自身を測るようなものです。基準が自分自身を確認するだけなら、基準はどこから自分の権利を持つのでしょうか。

応答：巻尺は自分自身で自分を吟味できませんが、第二の巻尺、既知の長さの対象、同じ長さを規定する別の手続きによって吟味できます。この本の基準も同じ状況にあります。基準は、自分自身によってではなく、自分に抵抗できるものによって吟味されます。挫折しうる例、反対に立つ反論、自分の秩序を知る読者の経験によってです。基準が自分自身に適用されることは、基準を循環させません。循環するのは、基準が自分自身への適用によって挫折しえない場合でしょう。この本は自分自身の基準で挫折しえ、第15.4章がどこでかを吟味します。

第二の反論：思考がどうやって自分自身の限界を認識できるのでしょうか。限界が思考の射程の内側にあるなら、限界ではありません。外側にあるなら、思考はそれを見ることができません。

応答：ここで語られた限界は、外から見られたのではなく、うまくいかないものによって内から気づかれました。「母」の下で欠けていた書簡、どんな記述も期待させなかったことをした友人においてです。限界に気づくことは、その向こうに何があるかを知ることではあ

りません。秩序がここではもはや届かないことを知ることです。期待を持つ思考ならどれでもそれができます。

一つの事例はこれから区別されなければなりません。全体性が自分自身を自分の肢節の一つとして含むべきとき、たとえば、自分自身を収載しないすべての目録の目録のようなとき、矛盾が生じますが、それはこの本の意味での秩序づけとは関係ありません。それらは論理学と数学の事柄であり、この本はそれらを解決しません。この本が主張するのは、基準の自分自身への適用がこの種のものではないということだけです。

15.2 自分自身の秩序はどこから来るか

自分自身の秩序を吟味する人は、決して選んだことのない基準、由来を知らない自明性に突き当たります。自分自身の思考も、経過としてのみ捉えられうる対象です（第10.2章）。

□□ 8: □□□□□

仕事について、教育について、政治についてのあなたの固い信念の一つを取り上げてください。どのようにしてそれに至ったかを自問し、最初の答えを書き留めてください。次に問いなさい。それが始まりだったのか、と。
最初の答えはたいてい、今日の根拠を供給し、元の根拠ではありません。それは、信念を守らなければならないときに挙げる議論であり、しばしば信念そのものより若いものです。さらに掘ると、信念を刻印した経験に突き当たります。耳を傾けてくれた教師、そうしなかった上司です。そしてその下に、考えることができたより前に身につけた自明性があります。家族で正常と見なされたこと、育った時代と場所で誰も疑わなかったことです。

これらの層は、今日の根拠より真でも偽でもありません。信念が早期の経験から来ていることは、その正しさについて何も言いません。それでも信念は正しいかもしれません。しかし、由来を知る人は、二つのことを区別できます。何かを信じる根拠と、それが正しいであろう根拠です。両方はしばしば一致し、ときには一致しません。

三つの問いが助けになります。それらは第10.3章が経過について述べたことから帰結します。以前、私はどんな立場を持っていたか、そ

してどんな、当時は理にかなった根拠からか。何が私を考え直させたか、議論、経験、それとも人々か。そして、すべての変化を通じて何が同じままであったか。最後の問いは、私がちょうど何を考えているかに関わりなく、私がどう考えるかを示します。そして、三つすべてから、前を指す第四の問いが帰結します。私の今日の信念のうち、どれがおそらくさらに変わるだろうか。すでに何度も考え直した人は、再びそうするでしょう。ただ、どこかを知らないだけです。

このように自分自身の秩序の由来を問う人は、他人の秩序もより良く理解します。彼らの信念も、同じように追理解できる道で生じました。これは、自分自身の信念と同様に、その正しさについて何も言いませんが、正しさが初めて吟味されうる会話を可能にします。

15.3 秩序づける者の高慢

この本が挙げなければならない最後の行き過ぎは、個々の秩序の仕方ではなく、秩序づけ一般に関わります。精確に区別し、きれいに区分し、根拠を要求することを学んだ人は、それによって高慢になりえます。彼は他人の誤りを見つけるために聞きます。「君は二つの水準を混ぜている」「それは単なる相関だ」 (DE: „das ist nur eine Korrelation“) 「君は根拠を挙げていない」。彼はしばしば正しく、それでも会話は終わっています。

これには、事柄の中にある根拠があります。能力に多くの労力を使った人は、それが確認されるのを見たいのであり、自分の方法が良い思考一般の尺度になりがちです。しかし、精確な秩序づけは一つの道具であり、唯一の道具ではありません。区分が妨げになる領域があります。友人の間の会話、聞いている音楽、共有している痛みです。そこで秩序づける人は、より多くではなく、より少なく理解します。

これもまた行き過ぎることができます。あらゆる思考で、自分が強迫的に区分しているのではないか、高慢に分節しているのではないかと問うのです。そのとき、警告は新しい強迫になりました。この本が挙げた行き過ぎ、区分すること（第7.4章）、分節すること（第8.3章）、網状化すること（第9.5章）、そしてここでの行き過ぎは、処理しなければならないリストではありません。それらは、能力が自分の問いを忘れた場所であり、それに対して助けになる問いは毎回同じです。ここで私は何のために秩序づけるのか、です。

15.3a 道

「ここで私は何のために秩序づけるのか」 (DE: „Wozu ordne ich hier?“) という問いは、本の初めに別の姿で立っていました。何が大切か、です。それは、問いが立てられる前に、読む際にすでに答えられていました（第1.0章）。そして、第1.4章はそれに第二の問いを結びつけ、未決にしました。最後に、事柄そのものに属する基準が、どんな意味で立つのか、です。この第二の問いは、事前に答えることはできず、この本がその間に歩んだ道によってのみ答えられました。

各段階が、前の段階に欠けていたものを示したことは、各部の終わりの回顧が個別に述べました（第4.6章、第6.7章、第12.5章）。最初の章から最後の章まで行われたのは同じこと、これをあのもののところへ置くこと（第1.1章）であり、毎回さらに事柄の中へ入ることであり、どの段階も前の段階を除去しませんでした。観点はパターンの中に、原理は根拠の中に、種と部分は自己展開の中にあります。各段階は、次の段階の中で、第11.6章が説明した三重の意味で止揚されています。

この道の外の基準を、この本はどこでも必要としませんでした。事柄は、秩序がうまくいかないところで声を上げました。二週間後に整理し直された洋服箪笥、次の一分で挫折した雲の中の顔、水星の軌道においてです。そして、事柄は、秩序が、なぜ自分の肢節がこれらであるかを言えるところで示されました。数のようにです。秩序と比較できる事柄の像は、そのためには必要ではありませんでした（第2.1章、第13.2章）。事柄に属する基準は、秩序が事柄において挫折し、それによってより精確になる運動です（第12.2章）。そして、秩序が自分の根拠を挙げることができるまで続きます。体系的に考えることは、第11.2章が規定したように、それゆえ、この運動を中断しないことも意味します。

15.4 試しとしてのこの本

この本は第0.3章で、自分自身の基準で測定されることを約束しました。ここに試しがあります。

なぜまさにこれら四つの部を持つのでしょうか。第一は何が一緒に属するかを問いました。観点、系列と区画、パターンです。第二はなぜ一緒に属するかを問いました。原理と根拠です。第三は一つの全体がどう構築されているかを問いました。五つの秩序の仕方です。第

四はあらゆる秩序が何を犠牲にするかを問いました。最初の三つは、秩序が自分の根拠についてどれだけ知っているかという問いに従います。全く知らない、個々の事例の根拠として、全体の根拠としてです。第四は三つすべてへ戻って適用されます。それゆえ終わりに立たなければなりません。第12.2章の第三の段階に従えば、この分節は、少なくとも大まかな特徴では、自分の原理を共説明しています。細部でもそうか、たとえば観点が独自の章を必要とするか、系列と区画の章に属するか、パターンがまだ第一部に属するかすでに第二部に属するかは争いえ、各部の終わりの回顧は理由を与え、証明を与えません。

この本は第二の段階、大切なものの保持を守っているでしょうか。それは自分では決定できません。試しを添えることしかできません。十分に完全か、それとも、あなたが自分自身の秩序づけで知っている何かが欠けているか。十分に単純か、それとも、例外が失われるほど単純か。その主張を自分自身の経験で吟味できるか。そして、砕けることなく拡張し、訂正できるか。

この本が主張を放棄するためには何が起こらなければならないか。第14.3章の問いはここでも当てはまります。それは答えられます。実験が多くの読者で、記述されているのと別様に終わったなら、つまり、人々が文字を苦もなく線として見たり、会話を一文にまとめられなかったりしたなら、一つの基礎が失われます。五つのどれにも還元できない秩序の仕方が見つかったなら（第12.5章）、第三部の分節は変更されなければなりません。自分の残余を見えるように保たない秩序が実証されることが示されたなら、第3.3章と第13.3章の条件は偽です。これらの場所で、この本は挫折しえます。

15.5 未解決のまま残るもの

答えが十分でないところでは、本書はその場でそれを述べます。まとめると、四つの問いが明示的に未解決のまま残ります。そのうちの二つは、歩みの中で初めて生じた区分が完全であるかどうかを問います。五つの秩序づけの仕方はこれまで実証されてきましたが、六番目のものがないということは示されていません（第12.5章）。第12.3章の相互参照の種類は、二つの箇所が形式または内容によって連関しているかどうかという問いから得られました。それらがあらゆる相互参照を捉えるかどうかは、四つのどれにも当てはまらない相互参照において示されなければなりません。第三の問いは、半分しか展開されて

いない尺度に関わります。第1.2章は、検索については手順と必要な予備知識を示し、概観については要素の数を示しましたが、秩序が一方を改善し他方を悪化させる場合に、両者をどのように互いに衡量すべきかは示しませんでした。第四の問いは、事例においてのみ引くことのできる限界に関わります。どこで自己展開が支え、どこで対象のさらなる枝分かれがもはや歴史と偶然にすぎないかは、個々の事例では示すことができますが（第11.3章）、一般的に示すことはできません。

本書の多くの考えは、すでに他の場所で考えられてきました。いくつかは、ここに示されているよりも強い形でです。付録Bは、それがどこであるかを示し、ここではその核心においてのみ現れた反論を、それ自身の姿で提示します。

さらに読む: 真理 (2025)

付録a: 演習

演習は、それが参照する章を前提します。演習には、調べられる答えはありません。うまくいったかどうかは、それを実行する事柄に示されます。

A1: 決定を秩序づける

自分に迫っている決定、たとえば、新しい仕事を受けるべきかを取り上げてください。通常の秩序は、賛成と反対の理由のリストです。それは系列であり（第3章）、その欠陥を持ちます。どの理由が一緒に属し、どの理由がより重いかを言いません。

代わりに、第12.1章の問いを、しかも自分に欠けているものだけを立ててください。これはどんな決定か。職業、家族、何が自分に重要か、それとも一つの冒険についての決定か。これらの種のそれぞれは、別の基準をもたらします。決定は何から成るか。どんな部分があり、どの部分が困難を作るか。決定は何と連関し、どの連関が単に観察されたもので、どの連関が結果か。そして、その問いが来る状況はどう生じたか。

決定がより明確になった場所に注意してください。たいていは一つの問いであり、残りは、その問いが示したことを確認しただけです。

A2: 論争を秩序づける

二人が在宅勤務をめぐって争っています。一方は、在宅勤務の方がはるかに効果的だと言い、他方は、部署の結束が損なわれると言います。一方はそれを管理嗜癖と呼び、他方は彼を、人間の間で起こることへの盲目と呼びます。

まず、二人が同じ問いを争っているかを吟味してください（第2.2章）。しばしば、それぞれが別の問いを唯一のものと思っている二人が争います。一方は個々の人の仕事を問い、他方は集団の仕事を問

います。次に、それぞれが主張する連関がどの種類かを吟味してください（第9.2章）。「家で働く人はより多くを成し遂げる」 (DE: „Wer zu Hause arbeitet, schafft mehr“)は、観察された連関か、結果でありえ、結果のためには観察のためより多くの証拠が必要です。そして、それぞれの主張がどんな条件の下で当てはまるかを問いなさい（第6.2章）。どんな種類の仕事で、どんな集団の大きさで、どんな住居状況でです。

終わりにはめったに勝者が立ちません。たいていは、それぞれを、それぞれの条件の下で妥当させる一つの区別が立ちます。

A3: 保管場所を整える

紙またはファイルのための保管場所を整えてください。まず、後で何に従って最も頻繁に検索するかを問い、この観点を上に置いてください（第3.2章）。合わないもののための区画を一つ作り、数か月後に、そこに何が集まったかを見てください。同じ種類のものがそこに群がるなら、区画が欠けています。そして、複数の場所に属する断片については、相互参照を作るか、コピーを作るか、タグを作るかを決めてください（第3.3章、第9.3章）。これらの解決のそれぞれは何かを犠牲にし、問いは、どの費用を負担したいかです。

一年後、保管場所を第1.2章の二つの尺度で吟味してください。特定の断片を見つけるのに何回の手が必要か、そのために何を知っていなければならないか。そして、保管場所にそもそも何があるかを、通すことなく言えますか。

A4: 凝縮と取り戻し

よく知っているテクスト、論文、章、長いメールを一文に要約してください。その文を、テクストを知らない人に与え、今や何を期待するかを言わせてください。彼が期待することとテクストにあることは、特定の場所で異なり、これらの場所で凝縮は何かを放棄しました（第1.3章）。それが、大切なものであったかを吟味してください。

第二の試し。一つの事例で学んだ原理を取り、見たことのない事例に適用してください（第5.2章）。それが支えるなら、あなたは原理を学びました。支えないなら、あなたはパターンを学び、今や、どこでそれが終わるかを知っています。

A5: 講演を分節する

分節を作る前に、言いたいことを書き留めてください（第8.3章）。次に、書かれたものが、それ自体からどの部分に分かれるか、なぜまさにこれらに分かれるかを挙げられるかを問いなさい（第8.1章）。その後に初めて、聞き手がついていくために何を必要とするか、それが別の順序を要求するかを問いなさい。そうなら、それは第一の分節の誤りではなく、第二の観点であり、両方の間で選ぶか、相互参照を置かなければなりません。「それについてはすぐに詳しく」。

A6: 章を吟味する

自分が書いた章、またはプログラムが自分のために書いた章を取り上げてください。各段落の最初の三語を縦に読んでください。それらがすべて同じように始まるなら、構造は図式的です（第8.4章）。リストを数え、それぞれで、その点が、一方が他方からどう帰結するかを言う文に解消できるかを問いなさい。それができるなら、リストは思考の代用品でした。章が何をするかを予告する文をすべて消し、何かが欠けるかを見てください。そして、章の終わりに、なぜ次の章が続くかを言う一文を書いてください。それが難しいなら、困難は文ではなく分節にあります。

付録b: 誰がこれを同じように見たか、そして最も強い反論

この本は誰にも依拠しません（第0.2章）。それは、この本の思考を最初に考えたという意味ではありません。この付録は、どこでさらに読めるかを挙げ、この本では核心においてのみ現れた反論を、その固有の姿で叙述します。この本の歩みが伝承されたものに似ているところでは、それは一方または他方の証明ではありません。それは、両方が同じ事柄に取り組んだことを支持します。

B1: 個々の章へ

概観、取り出し、凝縮（第1章、第13章）。 良い説明が、データを失うことなくどれだけ強くデータを凝縮するかで測定されることは、情報理論で展開されました。アンドレイ・コルモゴロフとレイ・ソロモノフの名と結びついたアルゴリズム的複雑性の理論、ヨルマ・リッサネンの最小記述長の原理においてです。

未決のままのパターン（第4.3章）。ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは『哲学探究』（第185節以下）で、数列「+2」を1000から先で別様に続ける生徒を用いて、有限の事例数が規則を確定しないことを示しました。ネルソン・グッドマンは同じ問題を「帰納の新しい謎」 (DE: „neue Rätsel der Induktion“)として立てました。ジャック・デリダは『署名 出来事 コンテクスト』（1972年）で、記号は反復可能なものとしてのみ記号であり、あらゆる反復において少しだけ別のものであるという思考を展開しました。

すべてを説明する原理（第5.3章、第14.3章）。 理論は、排除する分だけ役立つことは、カール・ポパーの『科学的発見の論理』における反証可能性の要求の中核です。説明されるものを単に倍加する説明への嘲笑は、モリエールが『気で病む人』で舞台に上げました。アヘンは、眠らせる力を持つから眠らせる、というものです。

惑星軌道（第4.1章、第5.2章、第5.3章）。 ケプラーは楕円軌道の法則を、ティコ・ブラーエの火星観測に基づいて1609年に『新天文学』で公表しました。アイザック・ニュートンはそれを1687年に『プリンキピア』で重力から導出しました。海王星は、ヨハン・ゴットフリート・ガレが1846年に、ユルバン・ルヴェリエが天王星軌道の摂動から計算した場所で見出しました。水星軌道のずれは、アルベルト・アインシュタインの一般相対性理論が1915年に初めて説明しました。

遅れたフィードバック（第5.1章）。 制御ループの一般理論は、ノーバート・ウィーナーがサイバネティクスという名で基礎づけました。豚市場における豊富と不足の交替は、アルトゥール・ハーナウが1920年代に記述しました。それは以来、豚の循環（Schweinezyklus）と呼ばれます。

空虚、任意、十分（第6.1章）。 同じ段階づけは、ヘーゲルの『大論理学』に形式的根拠、実在的根拠、完全な根拠として見出されます。事柄は、そのすべての条件が揃ったとき初めて現れることは、そこでは条件の理論において帰結します。十分と呼ぶことをヘーゲルは概念、つまり事柄をそれ自体から規定するものについて初めて行います（『エンツュクロペディー』第121節補遺）。第6.6章もこの方向を指します。段階づけはヘーゲルの論理学 – 思考の論理 (2026), 章 21.6とヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 24.3でヘーゲルのテクストに即して再構成されています。原因はたいてい他の条件のうちの一つであり、それらが一緒になって初めて十分であることは、ジョン・L・マッキーがより精確に規定しました。説明は常に比較事例を考え合わせること、なぜこれであってあのものではないかは、対比的説明という名で展開されました。とりわけバス・ファン・フラーセンとピーター・リプトンによってです。

区分の理論（第III部、第7.2章）。 類と種を作る差異による区分はアリストテレスに遡ります。新プラトン主義者ポルピュリオスは3世紀に『範疇論』への導入でそれを叙述しました。いわゆるポルピュリオスの樹、連続した二分法は彼にちなんで名づけられています。クジラは、カール・フォン・リンネが1758年の『自然の体系』第十版で哺乳類に置きました。すべての規則を破る有名な区分は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスが架空の中国の百科事典に帰しました。そこでは動物は、皇帝に属するもの、防腐処理されたもの、飼いならされたもの、遠くからハエのように見えるものなどに分かれます。ミシェル・フーコーは自分の『言葉と物』を、この箇所への笑いで始めました。

冥王星（第11.4章）。 惑星の新しい規定は、国際天文学連合が2006年8月に決議しました。きっかけは、冥王星より重い準惑星エリスの発見でした。

境界事例と不知（第7.4章、第11.4章）。概念の理解が、それを規定できないことに気づくところで始まることは、初期のプラトン対話篇の歩みです。『ラケス』でソクラテスは、勇気とは何かを問い、対話相手のあらゆる規定は境界事例で挫折します。とりわけ、洞察のない恐れ知らずがすでに勇気か、それとも無鉄砲かという問いです。『ソクラテスの弁明』でソクラテスは、彼が知らないことを知っていると信じない点で他者より優れていると言います。

周期表（第12.2章）。メンデレーエフは彼の表を1869年に公表しました。ガリウムは1875年、スカンジウムは1879年、ゲルマニウムは1886年に発見されました。

積み重なり（第7.3章）。積み重なりの誤謬は、メガラ派のミレトスのエウブリデスに帰されます。

樹木と網（第9.3章）。ファセット分類は、インドの図書館員S・R・ランガナタンが1930年代に発展させました。プログラミングで、継承より合成を優先する助言は、エーリヒ・ガンマ、リチャード・ヘルム、ラルフ・ジョンソン、ジョン・ブリシデスが1994年にデザインパターンについての本で規則にしました。

段階である種（第10.5章）。絵文字から語文字、音節文字を経て音素文字への系列は、イグナス・J・ゲルブが1952年に文字の発展法則として叙述しました。研究はそれ以来、それをあまりに一直線だと批判しています。種と段階がどう重なりうるかの例としては、粗い形でも役立ちます。

数（第11.1章）。数領域が、特定の計算がうまくいくように拡張され、その際、古い計算規則が保持されるべきであることは、ジョージ・ピーコックが1834年に定式化しました。永久原則として貫徹させたのはヘルマン・ハンケルが1867年です。

普遍、特殊、個別↑（第11.2章）。概念の三つの側面は、ヘーゲルが『大論理学』の概念の理論で展開しました（より短い形では『エンツュクロペディー』第163–165節。段階を追ってヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 26で解釈されています）。この本の歩み、事物に外側から付けられる秩序から、根拠を問う秩序を経て、自分の肢節を普遍から理解する秩序へ、は、大まかに、存在、本質、概念の彼の論理学の歩みに似ています。それは求められたのではなく、生じました。

機械的秩序（第14.1章、第14.2章）。行政における規則が手段から目的になることは、ロバート・K・マートンが1940年に目標移行として記述しました。官僚制の「鋼鉄の檻」という像はマックス・ウェーバーに由来します。目標にされた測定値が、良い測定値でなくなることは、経済学者チャールズ・グッドハートにちなんでグッドハートの法則と呼ばれます。

整合的欺瞞（第14.3章）。宇宙からの訪問者という説は、エーリヒ・フォン・デニケンが1968年に『未来の記憶』で広めました。社会の「陰謀論」について、カール・ポパーは『開かれた社会とその敵』（1945年、第2巻、第14章）で語りました。彼は、陰謀が存在することを争わず、陰謀が社会を説明することを争い、陰謀は、計画することをめったに達成しないことに注意しました。起こることはたいてい、意図的行為の意図せざる結果です。あらゆる欠けた痕跡が証拠になる閉じた形式は、リチャード・ホフスタッターが1964年のエッセイ「アメリカ政治における偏執的様式」(DE: „The Paranoid Style in American Politics“)で記述しました。同業の人々は、会話が公衆に対する陰謀で終わらずに集まることはまれであることは、アダム・スミスの『国富論』（1776年、第1巻、第10章）にあります。以前は妄想と見なされていた隠れた計画は、フランク・チャーチの下の米上院調査委員会が1975年と1976年に明らかにしました。エドワード・スノーデンが2013年に公開させた文書は、ほとんど誰も可能だと思っていなかった大規模監視を裏付けました。証拠の重みが、主張されたもののありそうもなさに従わなければならないことは、デイヴィッド・ヒュームの『人間知性研究』（1748年）の奇跡についての節にあります。カール・セーガンはそれを、並外れた主張は並外れた証拠を要求するという公式にしました。

共有された秩序↑（第14.4章）。認識が、思考様式を共有する共同体で生じることは、ルートヴィク・フレックが1935年に梅毒研究の例で示しました。トーマス・S・クーンはその思考をパラダイムの理論としてさらに導きました。

信仰の根拠と妥当の根拠（第15.2章）。信念の発生とその根拠づけを区別することは、ハンス・ライヘンバッハが発見の文脈と正当化の文脈の違いとして捉えました。信念の由来からその虚偽を推論する人は、論理学が発生論的誤謬と呼ぶものを犯します。

自分を吟味する巻尺（第15.1章）。オットー・ノイラートは認識の状況を、沖で自分の船を、ドックで分解することなしに改造しなければならない船乗りに比較しました。全体性が自分自身を含むべきときに生じる矛盾は、バートランド・ラッセルが、自分自身を含まないすべての集合の集合で発見しました。

B2：五つの反論をそれぞれの形態で

五つの反論は、この本では、それぞれの章に関わる限りでのみ取り上げられてきた。ここでは、それらを、その提唱者たちが与えた形態で提示する。

ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリ：樹とリゾーム（第3.3節、第5.3節）『リゾーム』および『千のプラトー』において、ドゥルーズとガタリは、一本の根から次第に細かい枝へと分岐する樹に対抗して、リゾームを提示する。リゾームとは、中心のない網の目であり、各点が他の各点と結びつき得、どこでも断ち切られて新たに始発し得るものである。樹は彼らにとって、すべてを一つの起源へと還元する秩序の像である。リゾームは、統一へと還元され得ない多様性の像である。『差異と反復』（1968）において、ドゥルーズはすでに、差異を同一者からの逸脱としてではなく、同一者のほうを諸差異の暫定的な凝固として考えることを要求していた。これは、類と種差による区分（第7.2節）をその根底から突くものである。

この本は、どんな秩序も選択するものであり、選択されたものが自然として現れ得るという所見に同意する。その応答は、選択が挫折において示されること、そして秩序がその残余を可視的に保持しなければならないことである（第3.3節、第13.3節）。ドゥルーズとガタリ自身、樹とリゾームが互いに浸透し合い、リゾームの中に樹があり、樹の中にリゾームがあることを強調している。これは、第9.3節の応答、すなわち両方が必要とされるという応答に近い。未解決のままなのは、第11章の自己展開——普遍的なものから全体を理解するもの——が、まさに彼らが最も鋭く批判する樹の形態ではないかということである。この本はこれに対して第11.3節で応答する。それが支えるところで支えるのであり、それ以上ではない。

ジャック・デリダ：静止することのない意味（第4.3節）デリダにとって、記号がそのものであるのは、反復され得るからにほかならず、あらゆる反復は記号を新たな連関へと運び、その意味をずらす。したがって、完全に自己自身のうちにあるような意味は存在しない。あらゆる概念は他の概念を指示し、他の概念との差異においてのみその意味をもつ。

この本は、パターンが開かれたままであり、使用のなかでずれていくことに同意する。その応答は、ずれが気づかれ得るのは、争いを引き起こす新たな事例においてであり、そこではパターンが依然として支えるかどうかを検査できる、ということである。デリダは、人が理解し区別できることを決して否定しなかった。彼が否定したのは、この理解が決して完結しないということであった。それゆえ、彼は一見

そう見えるよりも第4.3節に近い。未解決のままなのは、この本がその概念を検査する限界事例（第11.4節）が、それ自体すでに、検査されるべき概念によって選び出されているのではないか、ということである。

テオドール・W・アドルノ：概念と非同一的なもの（第6.4節、第13.3節） アドルノはマックス・ホルクハイマーとともに、『啓蒙の弁証法』において、人間を自然から解放すべきであった理性が、自然と人間に対する支配の道具へと変わり得ることを示した。『否定弁証法』において彼はこの反論を先鋭化した。あらゆる概念は個別的なものを普遍的なものの下に包摂し、その際に、それにおいて普遍的でないもの、すなわち非同一的なものを切り捨てる。思考は、概念を用いて概念を超え出ようと試みなければならない。

この本は、あらゆる凝縮が残余を残し、その残余が最も重要なものであり得ることに同意する（第13.3節）。その応答は、残余は、それが裏切る期待においてのみ姿を現し、秩序づけることをやめる者は、個別的なものからより多くを得るのではなく、より少なくしか得ない、ということである。アドルノはここで反論したであろう。残余が裏切られた期待においてのみ姿を現すなら、それはなお、それを超え出るべきである概念の尺度において現れていることになる。それでも彼は概念を放棄しようとは望まなかった。彼は、概念をそれ自身に反して用い、ある事柄を一つの概念の下に包摂するのではなく、複数の概念をその周りに配置し、それらのどれも単独では的中しないことを示す布置（Konstellation）において捉えることを要求した。これはそれ自体、秩序づけの一つの様式であり、第9.3節のファセットから遠くない。未解決のままなのは、「残余を可視的に保持する」(DE: „den Rest sichtbar halten“)という条件が意図以上のものであるかどうかである。ある秩序がこの条件を満たすかどうかは、個々の事例では検査できるが、普遍的に確証することはできない。

ミシェル・フーコー：知の秩序、権力の秩序（第9.4節、第11.5節） 狂気、臨床医学、監獄についての彼の研究において、フーコーは、知の区分が人間を秩序づけ、処遇し、生み出すことを示した。すなわち、病人、犯罪者、正常者は、単に発見されたのではなく、知と権力の実践のなかで同時に生成されたのである。『言葉と物』（1966）において彼は、各時代がその知を一つの枠組みへと分節し、その枠組みがそもそも何が秩序づけられ得るかを決定すること、そしてこれらの枠組みは進歩としてではなく断絶において互いに継起することを示した。これは、第12章の「どちらの秩序がよりよいか」という問いと、第15.2節の「自分自身の秩序はどこから来るのか」という問いを突くものである。イアン・ハッキングはこれに接続し、カ

テゴリーが、それらが把握する人間に反作用し、その反作用がまたカテゴリーを変化させる様を記述した。

この本は、人間についての概念がその対象を変化させること（第11.5節）、そして関係の読み方が自己自身を確認し得ること（第9.4節）に同意する。その応答は、概念が把握する人間はその概念に対して矛盾を唱えることができ、秩序に対する批判はそれ自体、より精確な区別を用いて作業する、ということである。フーコーは自分の書物を教義の体系ではなく道具箱と呼んだが、その力はまさにそうした区別にある。未解決のままなのは、当事者の矛盾が常に聞き届けられるかどうかであり、その応答は、自ずからではない、ということである。第14.4節は、共同体が吟味することをやめ得ることを示した。そうならないように注意を払う者は行為しており、それについては別の本で扱われる。

リチャード・ローティ：事柄それ自身の語彙は存在しない（第7.2節、第12.1節）『哲学と自然の鏡』（1979）においてローティは、認識が現実性を正しく写像することから成ることを否定した。『偶然性・アイロニー・連帯』（1989）において彼は、物をそれ自体においてあるがままに記述する語彙は存在しないと結論づける。したがって、ある区分が的中するかどうかは、事柄への問いではなく、何のためにそれが必要とされるかという問いである。対象それ自身が差異を作り出すところに限界を引くという基準は、鏡という表象の残余であろう。

この本は、あらゆる秩序がある問いに仕えることに同意する（第12.1節）。その応答は、事柄が成功と挫折において自らを知らせる、ということである。ガリウム、スカンジウム、ゲルマニウムが、周期表が空白を残した場所で発見されたこと（第12.2節）は、周期表自身が引き起こしたものではない。元素は欠けていてもよかったのである。それがすでに選ばれた語彙においてのみ確認できるということを、この本は否定しない。あらゆる語彙の外部に立つ視点はそのために必要ではない。割り切れないものは、自分がもっている語彙のなかで自らを知らせるのである（真理 (2025), 章 10）。

五つの反論すべてに対して向けられる再問い 五つの反論すべてに対して、しばしば、それらは自己論駁的であると反論される。その最もよく知られた形態において、ユルゲン・ハーバーマスは『近代の哲学的ディスクルス』（1985）において、カール＝オットー・アーペルによる遂行的自己矛盾の図式に依拠しつつ、この非難を提起した。すなわち、精確な概念を用いて概念に反対して書き、理論を用いて理論に反対し、秩序づけられた叙述を用いて秩序に反対する者は、自分が批判していることを自ら行っている、という。この非難は、見かけほど

には的中しない。五人はみなこの反論を知っており、応答してきた。デリダは、概念を使用しつつ同時にその限界を示すという図式によって、アドルノは、自己自身に反する思考によって、ドゥルーズとガタリは、樹とリゾームの相互浸透によって、フーコーは、体系を構築しないという放棄によって、ローティは、よりよい写像を主張するのではなく、より有用な語彙を提案するという指摘によって。この再問いにおいて正しい点は、より控えめなものである。五人のうち誰一人として、秩序づけることを放棄していない。彼らは異なる仕方で秩序づけ、より精確に吟味している。これこそ、この本の意図でもある。

B3: 他の本でさらに読む

ある章がシリーズの他の本でさらに展開されている場合、そのことがここに示されています。本文は、各章の終わりで 真理 (2025) を参照し、ある章がそこで直接にさらに展開されている場合には、倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026) と 組織 (2026) を参照します。

- 第0章（隣接する論理学についての本）: ヘーゲルの論理学 – 思考の論理 (2026), 章 1（その始まりにおける思考運動）
- 第0章（隣接する倫理学についての本）: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善
- 第1.3章（凝縮と偏見、他者の像においてさらに展開）: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善, 章 2
- 第5章（原理）: ヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 6
- 第6章（根拠）: ヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 5 and 7
- 第6.4章（ある根拠が誰に仕えるか、他者に負う根拠へとさらに展開）: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善, 章 3 and 10
- 第10章（経過）: ヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 4
- 第10.1章（争いがどのように始まったか、報復の系列へとさらに展開）: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善, 章 5
- 第11章（自己展開）: ヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 8
- 第14章（死んだ秩序、規則と制度へとさらに展開）: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善, 章 12 and 13
- 第14.4章（共有された秩序↑、経済へとさらに展開）: *Kapitalismus — Eine Einführung* (in preparation), 章 25
- 第15章（未解決のまま残るもの）: ヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 12

用語集

利用の手引き

この用語集は、前もって読まれるためのものではない。諸概念は、本書のなかで、秩序づける際に見出される事柄に即して展開される。したがって、それをここで最初に調べる人は、その規定に至る道筋なしに規定だけを受け取ることになる。

これは三つの事例を想定している。すなわち、ある語が通常とは異なる意味で現れる事例、順番どおりに読んでいないために導入部を読み逃した事例、そして本書のなかである表現が終始同じように使われているかどうかを確かめたい事例である。

秩序: 項目はアルファベット順に並んでいる。変母音はその基本字と同じものとして数える。

型 は見出し語の由来を示す。私たちの方法論は、この本とその姉妹書が独自に行う区別を指す。一般哲学的は、伝承のなかで導入され、ここでは特定の意味で用いられる表現を指す。

展開箇所 は、ある概念が展開される箇所を指し、そのすべての言及箇所を指すのではない。

意味していないもの は、手近な読み方を退ける必要がある箇所に置かれる。

関連項目 は、この用語集の関連項目を示し、ある概念が姉妹書のいずれかでさらに展開されている場合には、そちらの項目も示す。

普遍、特殊、個別

型: 一般哲学的

説明: 理解が完全であるためには、その理解が行き着いていなければならない三つの側面である。普遍とは、すべての事例において同一であるものであり、特殊とは、そこから条件のもとで生じるものであり、外へ向かっては種類として、内へ向かっては部分として現れる。個別とは、その両方が合わさる現実の事例である。

意味していないもの: 序列の三つの段階や、あらゆる事柄に課さなければならない三つ組。分節がどこまで及ぶかは、事柄そのものに示される。

展開箇所: 第11.2章、第11.3章

関連項目: 自己展開、概念、秩序づけの仕方; 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 用語集: 普遍（共同体の）

止揚

型: 一般哲学的

説明: ある規定を、より包括的な規定のうちへ受け入れること。この受け入れには三重の意味がある。その規定はもはやそれ自体だけでは妥当せず、それは保存され、そしてそれはより高い位置に立つ。なぜなら、今や、それがなぜそうなるのかが示されるからである。このようにして、種類、部分、連関、経過は、自己展開のうちに、すなわちそれらが自己展開のうちに根拠を持つところで止揚されている。そして本書の各段階も、次の段階のうちで止揚されている。

意味していないもの: 廃止すること。止揚されたものはなくなっているのではない。

展開箇所: 第11.6章、第15.3a章

関連項目: 自己展開; 真理 (2025), 用語集: 止揚, 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 用語集: 止揚

アクセス（Zugriff）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 一つの場所から別の場所を見つけること。歩数と必要な予備知識で測られます。検索はアクセスを与えますが、概観（Überblick）を与えません。それは、他に何が存在するかを示しません。

展開される箇所: 第1.2章

参照: 概観（Überblick）、相互参照（Verweis）

パターン（Muster）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 選択された観点（Hinsicht）において、事物の中に見出される反復。押し込まれるのではなく。パターンは先取り（Vorgriff）であり、次の事例（Fall）で実践的に検証されなければならず、開かれたままです。いかなる有限（Endliche）の数の事例もそれを確定しません。

意味していないもの: 認識（Erkennen）がはじめて生み出すもの。パターンが誤りうることは、それが認識によって作られるのではないことを示します。同様に、認識する者の観点なしに単に存在するものでもありません。

展開される箇所: 第3.4章、第4.1章、第4.2章、第4.3章

参照: 原理（Prinzip）、一般化（Verallgemeinerung）、観点（Hinsicht）

リズム（Rhythmus）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 収集と秩序づけの交代。収集に留まる者は結果に至らず、早すぎる秩序づけをする者は、素材に耐えない結果を持ちます。交代は事物から来ます。

展開される箇所: 第10.4章

参照: 経過（Verlauf）

一般化（Verallgemeinerung）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 広い範囲を持つパターン。既知の事例において何が同時に生じたかを言うが、なぜかを言わず、それゆえいつそれが妥当しないかも言いません。「練習が名人を作る」 (DE: „Übung macht den Meister“)が一例です。

展開される箇所: 第5.2章

参照: 原理（Prinzip）、パターン（Muster）

事実的、機能的、概念的連関（faktischer, **funktionaler, begrifflicher Zusammenhang**）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 二つの物が連関しうる三つの様式。事実的：観察されるが、それがどのように生じるのかは分からない。機能的：介入したときに何が変化するかを言う結果（Wirkung）。概念的：物が何であるかに存する連関。買い手と売り手のように。

見分け方: 関係思考（Beziehungsdenken）における誤謬（Fehlschluss）のほとんどは、これら三つの混同です。最も多いのは、事実的連関が機能的連関として読まれることです。「誰が利益を得るのか」という問いは、事実的連関を確認するものであり、計画ではありません。

展開される箇所: 第9.2章、第9.4章、第14.3章

参照: 関係（Relation）

体系、体系的（System, **systematisch**）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: その諸部分が一つの根拠（Grund）から理解されうる全体。体系的に思考するとは、なぜその部分がそれらであるのかを言えるように秩序づけること、それが言えない場所を知ること、そして、秩序が事物において失敗しより精確になる運動を中断しないことを意味します。

意味していないもの: あらゆる固定的な秩序。年度と発送者による書類整理（Ablage）は秩序づけられていますが、この意味では体系ではありません。

展開される箇所: 第11.2章、第15.3a章

参照: 概念（Begriff）、基準（Maßstab）、自己展開（Selbstentfaltung）

偏見

型: 一般哲学的

説明: 強力で素早い凝縮であり、まさに重要となる差異を手放してしまうもの。それに対して有効なのは、凝縮を控えることではなく、別の仕方、すなわち手放してしまった差異を取り戻し、どれが今度は重要であるかを吟味することである。

意味していないもの: 吟味に先立つあらゆる予期。それなしには人は何の対話も始められないだろう。それが偏見になるのは、もはや訂正できなくなったときだけである。

展開箇所: 第1.3章

関連項目: 凝縮; 真理 (2025), 用語集: 先-判断, 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 用語集: 他者についての像

共有された秩序

型: 私たちの方法論

説明: 受け継がれた、あるいは共同で吟味された凝縮のことであり、それは、どの語もすでに出来上がった秩序である言語から、学問の諸概念にまで及ぶ。人は個々の細部からではなく、他者たちが作ってきた秩序の蓄積の真っただ中から始める。

裏面: 誤った凝縮もまた、共同で保持されうる。そのような共同体のなかでまず失われるのは、ある秩序の正しさではなく、その秩序の誤りに気づく可能性である。

展開箇所: 第14.4章

関連項目: 凝縮、整合的な錯覚; 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 用語集: 制度

凝縮（Verdichtung）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 多くが少なくによって代表されます。技術はこれを圧縮（Kompression）と呼びます。凝縮が優れているのは、そこから重要点を回収できる場合です。その価値を決定するのは、それが何を放棄する（preisgeben）かです。

意味していないもの: 回避可能な損失。選択すべきは、損失と無損失の間ではなく、損失と損失の間です。

展開される箇所: 第1.3章、第13.1章、第13.2章

参照: 前判断（Vorurteil）、残余（Rest）、概観（Überblick）

分類（Klassifikation）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 五つの秩序づけの仕方の第一。問い「どのような種類（Art）があるのか」 (DE: „Was für Arten gibt es?“)による秩序づけ。諸部分は互いに並び立ち、相互に排除し合います。これは選別に最も近いものです。どのような事物が存在するのかという情報なしには、その構造も連関（Zusammenhang）も示すことができません。

展開される箇所: 第7.1章

参照: 正確で適切な区分（korrekte und gute Einteilung）、秩序づけの仕方（Ordnungsweise）

原理（Prinzip）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: パターンを生み出すもの。それが、どの条件のもとでパターンが現れ、どこで終わるかを言い、それゆえ見たことのない事例にも適用可能です。

意味していないもの: すべてを説明する原理。何も排除しないものは、何も語りません。

展開される箇所: 第5.1章、第5.2章、第5.3章

参照: 一般化（Verallgemeinerung）、パターン（Muster）、根拠（Grund）

基準（Maßstab）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 本書が、それ自身も含めてあらゆる秩序を測る問い。すなわち、その秩序は、なぜその部分がそれらであり、なぜそれらがそのように配置されるのかを言えるか。ある秩序がその根拠（Grund）を提示できない限り、それは事物に対して外的に接しています。

由来: 秩序と比較される事物の像からではなく、秩序が事物において失敗し、それによってより精確になる運動から来ます。

展開される箇所: 第0.3章、第12.2章、第15.3a章

参照: 外的（äußerlich）、自己展開（Selbstentfaltung）

増殖する秩序（wuchernde **Ordnung**

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: あらゆる新たな事例に対して新たなカテゴリー（Kategorie）を必要とし、あらゆる逸脱に対して例外（Ausnahme）を必要とする秩序。それはすべてを把握しますが、何も説明しません。

展開される箇所: 第12.2章

参照: 首尾一貫した欺瞞（kohärente Täuschung）、基準（Maßstab）

外的（äußerlich）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 事物の外側にのみ位置する特徴（Merkmal）。たとえば書物の色や判型。一般的に、ある秩序は、それが事物から帰結しないために、なぜその部分がそれらであるのかを言えないとき、外的と呼ばれます。

意味していないもの: 役に立たないこと。アルファベットは外的ですが、辞書にとってはまさに適切です。それが欠陥になるのは、そうした秩序が事物の秩序とみなされる場合に限られます。

展開される箇所: 第1.4章、第3.1章、第11.3章

参照: 系列と区画（Reihe und Fach）、基準（Maßstab）

推論（Schluss）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 充足的な根拠（Grund）を書き記すことのできる形式。それは移行（Übergang）を保証しますが、出発点を保証しません。前提を認める者は結論を認めざるを得ませんが、前提が正しいかどうかは、推論は語りません。

意味していないもの: 充足的なものとは別の固有の種類の根拠。

展開される箇所: 第6.3章

参照: 根拠：空虚、恣意的、充足（Grund: leer, beliebig, zureichend

本質性（Wesentlichkeit）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 事物をそれであるものにするもの。誰が問い、何のためかを問わず。より精確には、その事物自身に属し、その事情（Umstand）に属さない根拠の部分。第一の試み：これが変わるとき、残りも変わるか。

意味していないもの: ある問いにとっての重要性。本質的であるものについての多くの論争は、二つの問いの間の論争です。

展開される箇所: 第2.2章、第6.5章、第7.1章

参照: 重要性（Wichtigkeit）、緊急性（Dringlichkeit）、根拠：空虚、恣意的、充足（Grund: leer, beliebig, zureichend）

根拠：空虚、恣意的、充足（Grund: **leer, beliebig, zureichend**）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 根拠づけの三つの段階。空虚な根拠は、事物を別の名前で繰り返します（「それはまさに生存能力がなかった」 (DE: „sie war eben nicht lebensfähig“)）。恣意的な根拠は、多くの条件の中から一つを取り出します。充足的な根拠は、事物自身の性状（Beschaffenheit）を含むすべての条件をまとめて取り上げます。

展開される箇所: 第6.1章

参照: 原理（Prinzip）、推論（Schluss）、本質性（Wesentlichkeit）

概念（Begriff）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 事物の普遍的なもの、ただしそれが自らの特殊化を自らから生み出し、個別において現実となる限りにおいて。数の概念を持つとは、まさにそうした種類の数が存在する理由を見る人です。

意味していないもの: 単にその意味を持つ一つの言葉や、暗記する定義。この弱い意味でも本書はこの言葉を用います。たとえば第11.5章で。強い意味は、本書が目指すものです。

展開される箇所: 第11.2章

参照: 自己展開（Selbstentfaltung）、普遍、特殊、個別（Allgemeines, Besonderes, Einzelnes）、体系、体系的（System, systematisch）

概観（Überblick）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 何が存在し、それがどのように連関しているかを、すべてを個別に辿ることなく見ること。頭に保持しなければならない部分の数で測られます。

展開される箇所: 第1.2章

参照: アクセス（Zugriff）、凝縮（Verdichtung）

機械的および生きた秩序（mechanische und lebendige Ordnung）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 機械的とは、その部分が相互に無関係に、また何のためかという問いなしに進行する秩序を指します。生きた秩序とは、その部分が相互に規定し合い、全体の中ではじめてそれであるものであり、失敗する点に応じて自らを変化させることで自らを保持する秩序です。人間が担う秩序においては、規則（Regel）が何のためにあるのかを言えることに、それが示されます。

意味していないもの: 規則の数や厳格さの問題。航空機の整備や訴訟手続きでは、厳格な規定こそが生きた秩序です。秩序が死んだものになるのは、もはや誰もそれが何のために妥当するのかを知らないことによります。

展開される箇所: 第14.1章、第14.2章

参照: 首尾一貫した欺瞞（kohärente Täuschung）、残余（Rest）

正確で適切な区分（korrekte und gute Einteilung）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 区分（Einteilung）は、その部分が相互に排除し合い、合わさって全体を覆うときに正確です。それが適切なのは、限界（Grenze）が、対象（Gegenstand）自身が差異を生じさせる場所に沿って走る場合です。

見分け方: 自分の書物を色に従って秩序づける人は、正確には区分していますが、書物については何も捉えていません。区分は、論理的誤りを含まなくても失敗しうるのです。

展開される箇所: 第7.2章

参照: 分類（Klassifikation）、外的（äußerlich）

残余（Rest）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: いかなる凝縮も追いつかないもの。すなわち、そのパターンの一事例以上のものである個別、遂行（Vollzug）——遂行している間は観察できないもの——、まだ区画（Fach）の存在しない新たなもの。秩序はそれを把握する必要はありませんが、可視的に保持しなければなりません。

展開される箇所: 第3.3章、第13.3章

参照: 凝縮（Verdichtung）、系列と区画（Reihe und Fach）

相互参照（Verweis）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 秩序の二つの場所の間の連結（Verbindung）。それは構成（Gliederung）における位置によって、または事物によって成り立ちます。事物による場合は三つの仕方で成り立ちます。同一の事物として、別の発展（Entwicklung）における同一のものとして、または矛盾して規定されたものとして。相互参照はアクセス（Zugriff）を与えます。概観（Überblick）を与えるのは、それらが分岐する秩序です。

展開される箇所: 第12.3章
参照: アクセス（Zugriff）、関係（Relation）

秩序（Ordnung）

種類（Typ）: 一般哲学的
説明: 何かが推測できる配列（Anordnung）。すなわち、何がどこにあるか、何が欠けているか、何が互いに属するか。その最小の形式は、これをあれの隣に置き、それによって他から分離することです。
意味していないもの: 任意のあらゆる配列。風が隅に吹き寄せた落ち葉の山では、これもあれの隣にありますが、そこからは何も推測できません。
展開される箇所: 第1.1章
参照: 概観（Überblick）、アクセス（Zugriff）、凝縮（Verdichtung）

秩序づけの仕方（Ordnungsweise）

種類（Typ）: 私たちの方法論
説明: 全体に対して投げかけうる一つの問いと、それがもたらす構成（Gliederung）。本書は五つを見出します。種類、部分、連関（Zusammenhang）、経過（Verlauf）、そして最後に自己展開。自己展開は、他の四つへの答えがなぜそのように現れるかを問います。どれが問われているかは、何が欠けているかに示されます。
意味していないもの: 完全なリスト。六つ目が存在しないことは示されていません。
展開される箇所: 第III部への序論、第7章〜12
参照: 分類（Klassifikation）、編成（Komposition）、関係（Relation）、経過（Verlauf）、自己展開（Selbstentfaltung）

系列と区画（Reihe **und Fach**

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 選択された特徴（Merkmal）による秩序づけ。アルファベット、日付、領域。複数の特徴は互いに入れ子（schachteln）にされ、区画の中の区画になります。そうした秩序はアクセス（Zugriff）を与えますが、概観（Überblick）を与えず、残余（Rest）を可視的に保持しなければなりません。

展開される箇所: 第3.1章、第3.2章、第3.3章

参照: 外的（äußerlich）、アクセス（Zugriff）、パターン（Muster）

経過（Verlauf）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 五つの秩序づけの仕方の第四。問い「何が動いており、何に向かってか」(DE: „Was bewegt sich, und wonach?“)による秩序づけ。過程（Prozess）とも。記述は正しいのに、なお的中しない場合に用いられます。なぜなら事物はその生成（Werden）からはじめて理解可能だからです。

展開される箇所: 第10.1章、第10.3章

参照: リズム（Rhythmus）、秩序づけの仕方（Ordnungsweise）

緊急性（Dringlichkeit）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: ちょうど人を忙殺しているもの。それは秩序づける者の状況に関係し、事物には関係しません。状況が過ぎればそれは去り、事物はこれまで通りです。これは「重要」と呼ばれうるものの三つのレベル（Ebene）のうち第一のものです。

展開される箇所: 第2.2章

参照: 重要性（Wichtigkeit）、本質性（Wesentlichkeit）

編成（Komposition）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 五つの秩序づけの仕方の第二。問い「それは何から構成されるか」による秩序づけ。部分は全体の中でのみそれであるものであり、それぞれが全体から帰結する役割を持ちます。部分、構成（Gliederung）とも。

意味していないもの: 素材による分解（Zerlegung）。鋼鉄、ゴム、プラスチックからできた自転車は分解されていますが、構成されてはいません。

展開される箇所: 第8.1章、第8.2章、第8.4章

参照: 分類（Klassifikation）、秩序づけの仕方（Ordnungsweise）

自己展開（Selbstentfaltung）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 五つの秩序づけの仕方の最後。特殊（Besondere）が条件のもとで普遍（Allgemeine）から生じ、個別（Einzelne）において現実となる秩序。それは、なぜその部分がそれらであるかを言い、それによって本書の基準（Maßstab）を、度合いの差に応じて満たします。

意味していないもの: 他の四つと単に並び立つだけの仕方。それはそれらを自らの内に取り込み、それらが根拠を持つところではその根拠を与えます。それゆえ最後に位置します。

展開される箇所: 第11.1章、第11.2章、第11.6章

参照: 普遍、特殊、個別（Allgemeines, Besonderes, Einzelnes）、概念（Begriff）、止揚（Aufhebung）、基準（Maßstab）、秩序づけの仕方（Ordnungsweise）

観点（Hinsicht）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: これをあれの隣に置くときに、人が見ているもの。あらゆる秩序はそれを持ちます。たとえ呼び名がなくても。別の観点は、同じ物から別の秩序を生み出します。

意味していないもの: 単に主観的なもの。観点は人が選びますが、その中で示されるものは人が選ぶのではありません。

展開される箇所: 第2.1章、第2.3章

参照: 系列と区画（Reihe und Fach）、パターン（Muster）

重要性（Wichtigkeit）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: ある問いに関して重要であるもの。同じ問いを立てる者は、同じことを重要だと見出します。「重要」と呼ばれうるものの三つのレベル（Ebene）のうち中間のもの。そして最も容易に他の二つと混同されるものです。

展開される箇所: 第2.2章

参照: 緊急性（Dringlichkeit）、本質性（Wesentlichkeit）

関係（Relation）

種類（Typ）: 一般哲学的

説明: 五つの秩序づけの仕方の第三。問い「それは何と関連しているか」(DE: „Womit hängt es zusammen?“)による秩序づけ。連関（Zusammenhang）とも。これは樹木（Baum）と網（Netz）を同時に必要とします。連結（Verbindung）だけを見る者は、何が連結されているのかをもはや言えません。

展開される箇所: 第9.1章、第9.3章、第9.5章

参照: 事実的、機能的、概念的連関（faktischer, funktionaler, begrifflicher Zusammenhang）、相互参照（Verweis）

首尾一貫した欺瞞（kohärente **Täuschung**）

種類（Typ）: 私たちの方法論

説明: 内的に整合的で、生きたもののほぼすべての兆候を示すが、その素材をあらかじめ確定した解釈に従って選別し、あらゆる新たな事実に対して新たな補助仮定（Zusatzannahme）を必要とし、いかなることによっても失敗しえない秩序。

意味していないもの: 隠蔽された行為についての主張そのもの。誤りは説明の形式にあり、その対象にはありません。共謀は存在し、それについての主張は他の主張と同様に検証可能です。

見分け方: 三つの問いによる。説明は素材を貫徹しているか、それとも選別しているか。事例の全クラスを一つの根拠から説明しているか。それを放棄するためには何が起こらねばならないか。同じ問いが公式の説明にも、その反対者にも当てはまります。

展開される箇所: 第14.3章

参照: 増殖する秩序（wuchernde Ordnung）、機械的および生きた秩序（mechanische und lebendige Ordnung）、事実的、機能的、概念的連関（faktischer, funktionaler, begrifflicher Zusammenhang